出藍文庫

4-1

あきゅもこ総集編「夏と靴」

近藤貴弥 著

目　次

夏と靴……五
秋雨……四一
夢の続き……五五
四季……七九
二星……八三
流転……九一
幸福な死……九九
見出された時……一一七
白露……一三五
初めての朝……一四七
後書き……一五八

夏と靴

ある夏の日の午後、稗田家の屋敷は連日、庭の木から蝉の鳴き声が響き渡っていた。

書斎に籠もり、「幻想郷縁起」を書いていると空気が淀み、身体はすぐに不調を訴える。帯を緩めたり、足を崩したり、汗を拭ったりするが不調は続く。団扇に扇いでいる間は不調は和らぐのだが、扇ぎ続けるのも疲れた。氷を入れた冷たい紅茶も今ではもうぬるい。

真白な百合も、阿求と同じように疲れたのか頭を垂れている。

涼を求めて障子を開け放つと今度は蝉の鳴き声に包まれ、集中力を欠く。風鈴の軽やかな音も、今ではもうすっかり蝉の鳴き声に負けてしまっている。

ならば思い切って、この夏は編纂をしないことにしようと思ったが、そうなると下女の視線が妙に突き刺さる。下女は一切そんなこと思っていないだろうが、そんなことを思われる後ろめたいことを阿求はしているのだ。しかし、そもそも、「幻想郷縁起」というものは御阿礼の子がその一生をかけて行うことである。毎日こつこつとやることもあれば、今日はやらない日というのがあってもいいのではないか。その裁量は御阿礼の子が決められることなのではないか。

現に、八代目である阿弥の手記には、今日は桜を観に行く、帰りに藤原妹紅と会う、今日

は人里の農夫と一緒に田植えをした、暇そうにしていた藤原妹紅も誘う。今日は子供達に歴史を教えた、藤原妹紅から小言を受ける。今日は川遊びをした、相変わらず藤原妹紅が暇そうだった。今日は……といったように、他の御阿礼の子と比べて、「幻想郷縁起」の編纂という文字が出てこないことの方が多い。

そういうこともあり、阿求は今夏、「幻想郷縁起」の編纂を取り組まないように決意を固めたのだった。

無論、この決意は阿求一人の決意であるため、下女には一言も漏らさない。下女に編纂をやらないことを言ってしまえば、反感を買うだろう。あるいは、でしたら屋敷のことを、と言われるかもしれない。「幻想郷縁起」の編纂を行わいないのであれば、下女の言い分もよく分かる。屋敷の掃除、食事の準備を阿求が行うことに阿求自身抵抗がない。

しかし、今はそんな気分ではない。何もやりたくないのだ。

屋敷の掃除をする下女を呼び止め、冷たい水を張った桶を用意してほしいと頼んだ。何に使うんですか？　と問われたが、阿求は秘密ですと答えるかのように、茶葉やら何やらのお使いを頼んだ。下女は、はぁ……と答え、打ち水をしてもすぐに乾いた庭を見るように視線

を泳がせた。どれも急ぎではないので、お釣りで何か冷たい物でも食べて来て構いませんよと伝えると、下女の頬に分かりやすい喜色が帯びる。

下女がお使いに向かったのを見ると、阿求は安堵したように息を吐き、すぐに桶を持って縁側に行き、足元に置いた。

足袋を脱ぎ捨て、素足になる。白い足の甲が強い日に当たり、不快な汗が広がっていく。阿求は僅かな間、不快に耐え、袴の裾を僅かに持ち上げると、素足を水につけた。冷たい水が不快な汗を流し、両足を包み込む。足先から頭の先までひんやりとした冷たさに満たされ、火照った身体が楽になる。

夏の暑さで使い物にならなくなった頭が段々と元の調子を取り戻し、少し前に心に決めたことを後悔しようとしている。「幻想郷縁起」を編纂しないとなれば、本来編纂に充てていた時間が何もしなくいい時間になってしまう。阿求は一日のほとんどは編纂に費やしており、編纂を行うことが日常である。それを行わないということは、やることがないということだ。

阿求は今、暇を持て余している。

普段ならばこういう時間に、編纂に関することで動くのだが、編纂をしないと心に決めた

のだから動くわけにもいかない。夏が終わった頃に備えて、という考えもあるのだが、雲一つない快晴の空の元を歩くのは辛い。去年も一昨年も、編纂だとか、九代目だとかいう理由が阿求を動かしているのだが、今はただの少女だ。

少女らしいことをしようと考えてみたが、掃除や買い物や料理や洗濯や読書といったことしか考えられず、どれもしたくない。

阿求は少女であるが、人里の普通の少女とは違う特権的地位にいるのだ。やりたいこと、やりたくないことを選べる。下女に一声かければ、代わりにやってくれる。それが下女の仕事なのである。

そういう地位の少女は暇とどのように向き合っていたのだろうか。腰を上げようとした時、桶の外に水が跳ねた。袴は穿いているが足袋も下駄も履いていないことを思い出し、はしたくなく思い静かに腰を下ろす。

暑さの一つに、この袴も関わっているのではないかと考えられる。麻袴なのだが、この袴の下に紹の薄物を着て、帯を締めている。ということは、阿求はこの時分に二枚着ているわけである。

阿求は桶から素足を出し、端切れで小さな指先まで拭き、柱の日陰に身を潜める。風鈴の軽い音が耳元で聞こえる。袴の結びを解き、足を抜くとそれまで籠もっていた熱が外に排出され、気持ちが良い。阿求は安心したように一息つき、柱にもたれ、床に腰を下ろした。涼風が薄物の裾をなびかせる。蝉の鳴き声も少し遠くなったような気がする。

帯の隙間に挿し込んだ団扇を取り出し、ゆっくり扇ぐ。足袋も脱ぎ、袴も脱ぎ、白い両足を伸ばし、柱の影で団扇を扇ぐ自分自身を改めて見回し、微笑が浮かんでくる。

こんなところを下女に見られれば、小言の一つや二つは避けられないことだろう。けれども、今はその下女も買い物に出掛けており、阿求に編纂をさせたり、九代目御阿礼の子として振る舞おうとさせる者はいない。

暇だから何かしようと考えていたが、今日という日は、この暇を受け入れようとすら思っている。暇だから何かしようと思う必要はないのだ。これからのことは明日にでも、あるいはこの暑い日が終わる頃に考えればいい。小鈴の所で読んだ本に、外の世界では阿求ぐらいの時分の子供達はこの時期から秋にかけて学業に勤しまずに休んでいると読んだことがある。この世に生を授かり、初めて自由や余暇を手に入れたのだ。自然と口元に頬に濃い笑みを生

じる。

この時期は勤しむことに不向き極まりない。寒ければ着込んだり、温かい物を飲んだり、火鉢の火を起こしたりと対策が立てられるが、暑さとなると精々この程度だ。阿求がもう少し暑さに負けていれば、この帯すら解くのだがそれほど正気を失っているわけではない。

暇を受け入れたが、この暑さも同時に受け入れなければ、ただ不快な日々が続くだけである。不快な日々を打破するために何か買いに行こうと思ったが、素足になった今、再び足袋に足を通すのはあまりに辛い。かといって、素足のまま鼻緒に引っ掛けるのは好みではない。

下女がいるのだから、全てを下女に頼めばいいではないか、と思ったが彼女は今頃、かき氷や冷やしあんみつといったものに舌鼓を打っているに違いない。

こうなってくると、今度は屋敷に阿求しかいないことが不便になってくる。快適な環境を手に入れるためには、外に出なければならない。しかしそうなると、稗田家の者として振る舞わなければならないわけであり、こんな格好で出かけるにはいかない。日が傾けば、こんな格好でも許されるかもしれないが、そんな時間まで待てず、その頃にはもう下女が帰っている頃だ。

口の端から、小さな唸り声が漏れ出る。どうすれば最も快適に、これからの日々を楽に過ごせるだろうか。そんなことを考えていると、垣根の向こうから見知った顔が飛んできた。手には西瓜がある。少女は縁側に阿求が居ることなど知らなかったようで目を丸くする。少女はいつも垣根を飛び越えて屋敷に来ていたのであろうか。垣根の向こうから来たのは、藤原妹紅であった。

阿求は目を丸くする間もなく、全身が熱くなり、固まった。

「……あら、随分な格好ね、また後で来た方が良かったかしら？」

「え、あ、え、あー、大丈夫です？」

「そうなの？」

「ええ、まぁ、あっ、下女は今、使いに出てますので。何か飲まれます？」

「よろしく。これも冷やしましょうか」

阿求は自分でもよく分からない返答をして、立ち上がる。西瓜を受け取ろうと両手を妹紅の方に伸ばしたが、妹紅は脇に抱えたまま渡そうとしない。

「あの」

「持っていくわ」

この暑い中を歩いてきたであろう妹紅の首筋には汗一つない。妹紅を不思議そうに見ていると、妹紅の視線が桶に落ちていることに気付いた。それから、阿求と目が合う。桶の向こうの柱の影には、足袋も袴が置いてある。

阿求の頬の赤みはまだ引きそうにない。

妹紅は阿求に笑いかけ、西瓜を持ったまま炊事場に向かう。阿求は桶を持って、妹紅の後ろを追いかける。廊下の日の照ったところは熱され、阿求は自然と日陰に隠れるように妹紅の後ろ姿を追いかける。モンペの後ろには団扇を挿し込んでおり、妹紅も妹紅なりに暑さ対策をしているのだろうと分かった。

「お嬢さんは待っておけばいいわ」

「客人なんですから、大人しくしておいてください」

「暑くなるけど大丈夫？」

「大丈夫ですよ、多分」

「本当？」

「本当です。妹紅さんは平気なんですか」
「お婆ちゃんは暑さに鈍感なのよ」
「年をとらないのに何を言っているんですか」
小馬鹿にされたようで、思わず調子が強くなる。
炊事場に着き、妹紅は阿求から桶を受け取り、水を入れ替え、西瓜を冷やす。阿求は阿求で薬缶を火にかけ、茶の準備をする。阿求は包丁やまな板を取り出しながら、あの西瓜を小分けにした時に全てが乗る大皿がないことを思い出す。
妹紅はそんなことを知らないように西瓜をどう切り分けるのか考えている。阿求がじっと西瓜を見ていることに気付いたのか、妹紅はまた笑う。
「そんなに見ても切れないわよ」
「いえ、お皿が……」
「お皿？　じゃ、ちょっとずるしちゃいましょうか」
「ずる？」
妹紅はまだ冷えていないであろう西瓜を桶から取り出し、まな板に乗せると、慣れた手付

きで切り分ける。少し大きいのを二つ、小さいのを幾つも用意する。阿求は棚にしまっている大皿を取り出し、小さく切られた西瓜を乗せていく。

それでも、屋敷で食べるにはあまりに多く、腐らせてしまうことだろう。それにまな板の上には、まだ大きな西瓜が二つ残っている。

視界の端に湯気が見え、阿求は薬缶の火を消す。茶葉の入っている缶は、妹紅の頭上の棚にしまってあった。背伸びをすれば届くだろうが、下女が缶が奥にしまっているかもしれない。

妹紅は何も言わず棚の中から缶を取り出し、二人分の茶葉を茶漉しに用意してくれる。二人分のグラスを用意し、氷を幾つか入れ、茶を注ぐ。氷は音を立て、溶けていく。

阿求は不思議な心地良さが胸に広がっていることに気付き、その心地よさは屋敷にいるのにも拘らず、妹紅にまるで客人として扱われているからではないかと思った。妹紅に客人として扱われているのは決して不快なことではなく、むしろ心地良い。下女のように全てを妹紅がやるのではなく、ある程度のことは阿求に、ある程度のことは妹紅に、と役割分担されているからだろう。その役割分担を決めるのは妹紅でなければ、阿求はもっと心地良いもの

を味わっていたことだろう。

妹紅が何かすることに対して嫌だと思っているわけではない。主導権を握りたいわけではない。ただ、屋敷の人間として客人にやらせてしまうのを忍びなく思っているだけのことだ。

妹紅にそんなことを打ち明けたところで、私が好きにやっているだけだから、と言われてしまい、そう言われると阿求は何も言い返せなくなる。ならば阿求も妹紅のように、好きにやっていることですから、と言い返し屋敷の者として振る舞えればいいのだが、阿求はそれほど強かではなかった。

グラスを盆に乗せ、食卓に運ぼうとした時、妹紅は大きな西瓜を手に取り、かぶりついたのが見えた。まな板の上にあるもう一つの西瓜は阿求の分ということだろう。

阿求も妹紅を真似て、西瓜に手を伸ばそうとしたが、妹紅の顎に垂れようとする果汁を見て、阿求は懐から手ぬぐいを出し、妹紅に差し出した。妹紅は目だけで阿求に礼を伝えると、何も言わず西瓜を食べ続ける。妹紅は頬に流れる果汁を時々拭いながら西瓜を食べ終えると、まだ置いてある西瓜を見た。

「食べないの？」

阿求は西瓜を新しい皿に移し、食卓まで運び、匙で小さく分けながら食べる。思っていた通りまだ冷えていない西瓜だったが、甘い。

妹紅は阿求の前に腰を据えると、思い出したかのように遠慮がちに声をかける。

「あの子が帰ってくる前に片付けた方が良いんじゃない？」

阿求は炊事場に目を遣ったが、包丁もまな板も妹紅がもう洗っておいてくれたようだった。ならば、何を片付けた方が良いのだろうかと考えを巡らせたが、縁側に置いてある足袋や袴のことを言われているのだと分かり、咳払いを零す。妹紅の追及から逃れるように顔を背け、小さな声で答える。

「食べ終わったらやる予定です」

阿求は手早く西瓜を食べ終えると少しきつく感じる帯を微かに緩め、縁側に置かれたままの袴や足袋を寝室の端に片付けた。片付けている最中、妹紅に何故、と訊かれる前に阿求は正直に自分から話してしまおうと思った。尋ねられてしまえば、色々と他のことも答えさせられるに違いない。

居間に戻ると、妹紅に団扇で扇がれる。阿求も帯の隙間に挟んでおいた団扇を取り出し、

扇ぎ返す。そんなことをしていると二人共おかしくなったのか二人して笑う。卓袱台の真ん中には薬缶があり、薬缶の周りには茶漉しや茶葉の入っている缶が置いてある。

氷の溶けた茶を飲み、阿求は薄物しか着ていないことや足袋を脱いで素足であることの理由を告白する。

「暑かったんです」

「あの子はまだ帰ってこないの？」

「今頃、茶屋でのんびりしているんですよ」

「何かあったの？」

「私から言ったんです。避暑に丁度良いかな、と」

「それで阿求も、ってわけ？」

妹紅はきっと、阿求がこの夏、編纂をしないと決意を固めたことを知らない。編纂の間に気分転換をしている、と考えていることだろう。

阿求が隠そうとしても、妹紅にはきっと気付かれる。他の人間や妖怪と比べ、妹紅が屋敷に来ることが多いということもあり、いずれの時も編纂をしていないとなれば妹紅も察する。

阿求としても、妹紅に隠し事はしたくなかった。妹紅に隠し事をしようとしたところで、妹紅は千年程度生きた人間なのである。年端のいかない阿求の隠し事など、すぐに見破り、気付かない振りなど容易いことだろう。

見破られるのであれば自分から正直に告白した方が心持ち楽だろう。見破られるのであればという考えが働くためか、阿求は妹紅に隠し事をしたくなかった。隠し事を見破られた後のことの方が恐ろしいといった負の感情の働きではなく、妹紅ならば隠し事をしなくても良いだろうという思いから生じるものだった。

阿求は心のどこかで妹紅のことを信頼している気がする。何も知らない妹紅のことをそう思えるのは、妹紅が御阿礼の子と関わりがあるからであろうか。妹紅と御阿礼の子との縁が、阿求の内にも存在し、全然知らない、不老不死の少女のことを信頼しているのだろうか。阿求は妹紅のことを信頼しているが、妹紅は阿求に信頼されたいのだろうか。阿求にそう思われて、妹紅は辛くならないのだろうか。妹紅は老いることも死ぬこともなく、阿求は二十年もしない間に死を迎える。そんな少女に信頼され、妹紅は辛くないのだろうか。辛くならないほど、妹紅は年を重ねているのだろうか。

阿求は無意識の間に、妹紅の積み重ねられた時に寄りかかり甘えているようなだった。妹紅に言えば、一人で生きてきたつもりなの？　と笑われることだろう。妹紅が側に居ると、まだ若い阿求の全てが許されてしまう。果たして、それで良いのだろうか。妹紅の善意に甘えられる限り甘えても良いのだろうか。

御阿礼の子であるならば、役目を貫くために甘えることは許されただろう。が、今の阿求は「幻想郷縁起」の編纂をしていないただの少女である。そんなただの少女が妹紅に甘えるなど許されるのだろうか。

「避暑というか気散じというか……？」

「つまり、のんびりしているってことね？」

「こんなことを言うと怒られるかもしれないんですけど……私、ちょっと編纂に費やす時間をなくそうと思うんです」

妹紅は空になった湯呑みに新しいお茶を注ごうと伸びした手を止め、阿求をまじまじと見詰める。強い日差しを受け強く輝く瞳の奥に隠し切れない驚きが広がっている。阿求はすぐに自分の言葉が足りなかったことに気付き、慌てて言葉を紡ぐ。

「あ、いや、違うんです。違わないけど違うんです。……えっと、ですね。暑いじゃないですか。こんな時期に書斎に閉じこもって編纂を続けるなんて、体力をいたずらに消耗するだけだと思うんですよね。短い一生を更に短くするぐらいでしたら、この夏は……いやこの夏だけじゃありません、これからの夏は編纂をしないのではどうだろうかって思ったんです。幸い、忘れることはありませんし、秋や冬に編纂したらいいかなって。だから、私は今、ただの女の子なんです。駄目でしょうか?」

妹紅は湯呑みに新しい茶を注ぎ、氷を入れる。匙で強引に氷を溶かし、答える。

「良いんじゃない。編纂をする阿求が、そういうことを思っているのだから私達は何も言わないわよ」

「甘えているかもしれないんですよ?」

「何か言われたら、紫だって冬眠しているじゃない、って言えば解決よ」

「解決なんでしょうか……?」

「解決よ。ここは、あなたが思っているほど責任感の強い人間や妖怪ばかりじゃないのよ。各々が各々のペースで、各々の責務を果たしている。それだけよ」

「難しい世界ですね」
「難しいと思い込んでいるだけよ。もう少し大人になれば、阿求でも分かるようになるわ」
「分かるようになるでしょうか？」
「大丈夫よ」
励ますように笑う妹紅に、阿求も釣られて笑った。そうして、妹紅も阿求と同じように素足であることにようやく気付いた。
普段ならばブーツを履いている彼女が、素足を晒している記憶を探したがどこにも見当たらない。長い髪を一本に結っている姿はこの時期の定番となっていたが、裸足になっているのは見たことがない。思い返してみると、妹紅の白い足先まで見たことがない。
記憶の中に妹紅の姿は何度もあるが、阿求の目は妹紅の背中を追いかけることが常であった。そして、自分より少し大きい程度の背中でどれほどのものを背負っているのだろうかと考え、阿求自身が妹紅の背中の重みの一つになっていないだろうかと思っている。
阿求は妹紅を見ているようで全く見ていなかった。阿求が見ていたのは、妹紅にどう見られているのかという己自身だった。

阿求の両頬は恥ずかしさからか赤みを帯び、耳朶まで熱が広がる。熱を冷まそうと、妹紅と同じように冷たい茶を用意し、一気に飲み干す。

「暑いですね」

「そうね。ねぇ、阿求は今、暇なのよね？」

「ええ、まぁ……」

歯切れの悪い返答になったが、妹紅は気にすることなく続ける。

「女の子らしく、買い物にでも行きましょう」

「買い物？」

「そうよ。欲しいものとかないの？」

「使いを頼みましたし……」

買い物ということはこれから外に出るということだろう。本来であれば薄い羽織の一枚でも羽織るのだが、薄物の快適さを味わってしまったため羽織りたくない。陽が暮れていれば下駄を履けるのだが、まだ陽は高いところで輝いている。何を履けばいいのだろうか。妹紅の提案を断ることはできる。しかし、これからの時期、履き物に悩んだ末、一歩を屋敷から

外に出ないというのは難しいことだろう。何かしらの用事で外に出なければならないことは有り得る。

下駄箱にある履き物は、どれも真昼に薄物で、素足で履くことを想定していない。足袋を穿いたり、夜になってから履くような物しかない。

「靴が欲しいです」

「……靴？」

「これからまた足袋を履いて、袴に足を通してなんて嫌です」

「気持ちは分かるけれど、そんな靴あるの？」

「ないんでしょうか？」

「探し回ってみる？」

妹紅はそう言い、すぐに何か言おうとした。阿求は妹紅に何か言われるよりも早く、新しい物を買う気で胸が高鳴り、妹紅の手を取った。妹紅の手は阿求の手より少しだけ冷たかった。新しい物を買うのも楽しみだったが、妹紅に普通の女の子として扱われることに胸が高鳴った。

探し回ることを考えれば、長い間、外に居るということだろう。ならば日除けが必要になる。

「出掛ける前に準備をしましょう。帽子はありますか？」

「ないわよ」

「日傘は？」

「そんなものあるわけないじゃない」

「でしたら、お貸ししますね。どっちがいいですか？」

「帽子の方が良いわ」

阿求は妹紅の返答を聞くや否や、他の部屋の箪笥の一段を引き抜き、手鏡と共に戻ってきた。中には沢山の夏用帽子がしまってあった。妹紅はその量を見て、驚きをそのまま口にした。

「沢山あるのね」

「両手が使えるのが便利でしたので」

阿求も一時期はこの時期は帽子を被ることがあるのだが、最近は日傘の方をよく使うこと

の方が多い。紫から誕生日のプレゼントとして貰い、似合うと言われ、自分でも幾つか買い、愛着がわいた。

妹紅は幾つかの帽子を試着して、麦わら帽子を選ぶと小さく笑った。小さな妹紅の顔が一層小さく見えた。目の下に落ちてくる影が、妹紅の思慮深い瞳を強く輝かせる。

「これにするわ。草鞋とも合うでしょ」

帽子を片付け、阿求と妹紅は出掛ける。日傘をさし妹紅と共に歩く阿求はすぐに後悔を覚えた。普段の調子で視線を上げても日傘や帽子しか見えず、妹紅の顔は輪郭程度しか見えない。

「私も帽子にすればよかったかもしれないですね」

「そう？　似合ってると思うわよ？」

「……ありがとうございます？」

「靴って言っても、あるのかしら？」

「ブーツがあるからあると思うんですけどねぇ……。妹紅さんどこか知りません？」

「知っていることは知っているけれど、そこに阿求の望むような物があるかは分からない

わ」

「とりあえず、素足で履くことを前提とした物を」

阿求は靴を欲しかったが、具体的にどういう靴が欲しいのかということはまだはっきりと浮かんでいない。ただ、この時期に素足で履ける靴が欲しいだけである。涼しさを考えれば、下駄や雪駄や草履といった親指と人差し指とで引っ掛けるのが良いのだろうが、阿求はそういう履き物しか履いたことがない。そういう靴を買うのであれば、新しい履き物をと考え、わざわざ慣れない靴を探し求め、履こうとする必要はない。

「もう一つ付け加えるとしましたら、そうですね、白昼でも履ける物が良いです」

「あるの？」

「ないんですか？」

「さぁ？」

妹紅は歩調をゆるめ、考えようとする。阿求は空いている手で妹紅の手を取り、先を歩く。

「そんなこと考えたって仕方ありませんよ。お昼はまだ長いんですから行きましょう」

「元気ね」

「体力が有り余っているんです」
「編纂って体力がいるのね……」
「妹紅さんもやりますか？」
「結構よ。皆、大変じゃない」
「大変だったんですか？」
「大結界ができるまではこんなに平和じゃなかったから。人里に、人間と妖怪との間に境界が引かれたのも阿求の代になってからだから」
「ですが阿弥は……」
妹紅にそう語られても、記録として残っている阿弥の手記は随分と穏やかな日々を送っている。そのどこにも忙殺の様子は見て取れない。
「あれは馬鹿だからね。自分の仕事だとか編纂だとかそんなこと未来のことより、今目の前のことをやりたいだけの男だったから」
「それでも編纂は終えた、と」
「晩年はずっと文机にかじりついて編纂していたからね。随分と時間を無駄にしてしまった

と零していたことがあったけど、私も紫も誰も彼を責めなかった」

妹紅の言葉に引っ掛かりを覚え、阿求はすぐに反論を口にしようとした。編纂を終えたのならば、八代目である阿弥の生き方を責めるのはおかしなことなのではないだろうか。御阿礼の子以外に編纂を苦しみや重みを知っている者はいない。たとえ当人が自らの半生を振り返り後悔をしようが、それを責めようと思うのはあまりにおかしなことなのではないだろうか。

責める前に、御阿礼の子の大変さを知っている妹紅も紫は彼を助けになるようなことをしなかったのだろうか。彼が一つでも楽になるようなことをせず、自嘲を攻め込むようなことを考え、妹紅は何がしたかったのだろうか。

妹紅が阿求の反論の内容が分かっているのか制するように反省の色を強める。

「責めるだとか責めないだとか、私達にそんなことする資格なんてないのよ。やっていいのは、本人である阿弥か阿弥を先代に持つ阿求のどちらかなの。そう分かっていても、私達の口から、そう思うならどうしてもっと早く……なんて言葉が飛び出しそうになることは何度かあったわ。でも、言わなかった。最後の最後は先代達と同じように文机にかじりついて編

纂をしたけど、それまでの彼は編纂だけが自らの一生の全てではないことを示そうとしていたことを、私達は知っている。だから記録には、自分がいかに大変だったのか、なんて記録は残さないようにした。大変なのか御阿礼の子だったら皆分かるから。他の記録を読めば分かるから。だから自分はもっと楽しいことを記録する。そう言っていたわ」

先代の思い出を振り返る妹紅を、阿求は快く思わなかった。記録にないことを知れるのは嬉しいことなのだが、今そんなことを話されても困る。今、阿求と妹紅は、新しい靴を買うために共に居るのだ。先代や過去のことではなく、今を見てほしかった。阿求は何も言わず、妹紅の手を強く引っ張り、妹紅の調子を気にすることなく先へ先へ進む。

妹紅は驚きながら歩調をゆるめない阿求に笑う。笑われると己の心の内まで見透かされているようで恥ずかしくなり、微かに腹立たしくなり、頬を膨らませる。

「そんなに昔を思い返すことが面白かったですか」

「ごめんなさい。おばあちゃんだからね、自然と昔話が多くなっちゃうのよ」

「おばあちゃんだったり女の子だったり淑女だったり、妹紅さんは色々と忙しそうですね」

「そう？　変わる？」

「結構です」
そんなことを話していると、一軒の履物屋の暖簾が見える。店の前には焼き下駄や雪駄が飾ってある。
「阿求、そこよ。そこの履物屋」
「履物屋ですよ？」
「あるから」
眉を微かに顰める阿求に、妹紅は阿求を無視して暖簾をくぐる。中には外と同じように下駄や雪駄や草履が置いてある。店員は妹紅を見ると何も言わなかったが、阿求を見ると媚び諂うように頭を下げてくる。
「何をお求めで？」
店員に促されるように近くの椅子に腰掛け、阿求は欲しい物を口にする。
「靴を」
「履き物ではなく？」
店員は阿求の足先に視線を落とし確認を取る。店の壁には本の中でしか見たことのない靴

が掲げられている。それらの靴は下駄や雪駄のように木で作られていないが、同じように足先に引っ掛けて履くようだった。阿求はそれらの靴を指差し、答える。

「ああいう靴は家にあるのと変わらないので……」

阿求の答えに店員は嬉しそうに笑い、店の奥に消え、再び戻ってきた時には一足の黒い靴を持っていた。暖簾の隙間から漏れる光を受け、艶かしく輝く。その靴は、阿求や妹紅の履くブーツのように、爪先から足の甲、踝まで覆う靴だった。阿求の足には合わないような気がする。阿求の小さく柔らかい足に比べて、靴が堅い印象を受ける。阿求のような少女が履くのではなく、大人の男性が履くように見える。

「こちらは牛の革で作られた靴となっております。外の世界の遠い国で作られた物を基本にしております。いやはや、稗田様が新しい靴を履かれるとなりますと、人里でも普及すると思いますので嬉しい限りです」

「他は？」

「どういう靴をお求めでしょうか？　お色や形、こういうのが欲しいというイメージでも結構です」

そう問われた阿求だったが、どういう靴が欲しいのかイメージが固まっているわけではない。ただ、この時期に過ごしやすい靴が欲しいだけである。その旨を正直に伝える。

「この夏に履きやすい靴を一足」

「この夏ですか……となりますと、お色の方は涼し気な色の方が良さそうですね。下駄や草履に近いですが、ここにあるような物とはまた異なった靴、というのはどうでしょう？」

「実物はありますか？」

「少々お待ちください」

店員はそう言って、奥に消える。阿求は店の壁を眺める妹紅に救いの目を投げかける。それは、こういう靴を買ってもいいだろうか、という確認でもあった。妹紅は阿求の視線を受け、微笑する。

「良いんじゃない、好きな靴を買って」

「妹紅さんは、どんな靴がお好きですか？」

「私？　んー、私は別に……いや、考えたことないわねぇ。阿求はどんな靴が好き？」

「好きとか嫌いとかそういうことじゃないんですけど、あんまり足が見えるのは……」

阿求は店員が先に持ってきた革の靴のように、足全体が隠れる靴の方が好みだった。足の甲は踵を人前に晒すという靴は、強い羞恥心が働くのだ。が、先程の革素材の靴は、この時期に履くことを想定した靴ではないだろう。

「下駄も一緒じゃない？」

「下駄は鼻緒があります」

「……そういう問題？」

「そういう問題です」

店員が店の奥から戻ってきた。店員は二つの箱を持っていた。阿求の前で両方の箱を開ける。片方は薄水色で、爪先と踵が隠れるように覆われている靴だった。踝の辺りには同じ色の留め具があり、踵部分には下駄のように数センチの高さが設けられている。もう片方は白く、爪先が覆われているが隠れることがなく、丸い足の甲を晒すようになっている。踵部分に一寸程の高さがあり、開いている。どちらの靴も共通して、先程の革素材と比べて丸みを帯びており、土踏まず部分が細くなっている。阿求達少女用の靴なのであろう。

「よろしければ、履かれますか？　大きさや色合いも履いた方が分かられるかと」

「ありがとうございます」
阿求は店員の厚意に甘え、下駄を脱ぐ。白色の靴に足を入れる。立ち上がろうとして、バランスを崩した。踵部分に設けられた一寸ほどの高さが下駄とは微妙に違う感覚を生み出したのである。
「大丈夫？」
妹紅に支えられたが、阿求はバランスを保とうと少し足を一歩、二歩前へ動かす。その時、阿求の耳に快い軽い音が響いた。阿求の足元から奏でられてものだった。阿求は二重の驚きに包まれ、
「何とか……」
と答え、椅子に腰を下ろした。両足を上げ、足を見下ろす。自分の足に鼻緒がない。白い足の甲に、阿求の丸い影が落ちている。足を晒すという初めての行為に頬を赤めながら、胸は大いなる高揚で満たされていた。
「こちらの靴も履かれますか？」
阿求は店員に進められるがまま、もう一足の水色の靴にも足を入れる。先程の白い靴と比

べると履きやすいように思える。しかし、踵に違和感を覚える。阿求は一息つき、ゆっくりと慎重に立ち上がる。慣れないせいか、足の変なところに力が加わり震える。

「力抜いたら大丈夫よ」

「ですが……」

「さ、あの鏡の前まで」

手を取られたが、妹紅は決して引っ張るような真似はせず、阿求の恐れや不安や緊張を和らげるように合わせてくれる。妹紅の歩幅に合わせるように、阿求も歩を進める。足元から軽やかな、快活な響きが聞こえてくると緊張が和らぎ、口元に笑みが浮かぶ。

鏡の前に立つと足元が全く違うことに改めて気付かされる。裾と靴の隙間から覗く足首に巻かれた細い留め具が、細い足首をより細く見せる。光の下に晒された鼻緒のない足、普段ならば晒されている爪先は柔らかい水色の内に沈んでいる。

心なしか目線が高いような気がする。妹紅の顔も普段と比べて近くに見えるような気がする。妹紅は阿求の視線に気付かず、嬉しそうに笑っている。

「良いじゃない」

「……大胆じゃないでしょうか？」
阿求が口を衝いて出たのはそんな言葉だった。
「良いじゃない、女の子なんでしょう？」
「そうですが……」
「お気に召さないようでしたら、別の靴もありますが？」
「あ、あの、妹紅さんは、どっちが良いと思いますか？」
「え？」
妹紅は阿求の姿を見て、足元を見た後、椅子の所に置いてあるもう一足の靴に目を遣った。
阿求はどちらの靴も良いと思っている。どちらの靴も買えば良いのだが、そうしてしまうのは欲張りなような気がしてならない。二足買ったところで二足とも履けるとは思えない。最初の方は二足を代わる代わる履くかもしれないが、次第に片方が気に入り、片方しか履かない未来が見える。沢山の茶葉の中から自分の気に入った茶葉を飲み続けているように。
ならば、この段階で一足だけに絞ってしまおうという魂胆だ。
「そうね、私はこっちの方が好きよ。夏っぽくて、涼し気で、持っている物とも合うと思う

わ」

妹紅はそう言って、麦わら帽子を阿求の頭に被せ、店の端に置いていた日傘を手にする。阿求に追及されないように妹紅はそのまま店の外に出る。阿求は手早く会計を済ませ、妹紅の背中を追いかける。妹紅は店の外で日傘をさして、阿求が出て来るのを待っていた。

「もう、待ってくださいよ。どうしたんですか急に」

突然のことに唇を尖らせる阿求を気にせず、妹紅は微笑を浮かべている。妹紅の視線は阿求の足元にあり、靴にあり、足の甲にあった。普段見られることのない部分をまじまじと見られると恥ずかしくなってくる。それでも、胸は喜びに満ちている。妹紅から初めて贈り物も貰った。そのことが嬉しくて堪らないのだ。

「良い靴ね」

「良い靴だと思います」

慣れない靴で歩くせいか、すぐに足に負担がかかっているのが分かった。阿求はそれでも妹紅の選んでくれた靴を、そういう理由で脱ぎたくなかった。家に帰った頃、鼻緒で擦り傷を作ったように踵や足首もすれるかもしれない。そうなれば、屋敷から出るのは難しくなる。

妹紅は責任を感じて、また阿求の屋敷に来るだろうか。来るに決まっている。そうなれば、今度こそ二人で屋敷で穏やかな昼を過ごそう。阿求は額の汗を拭い、妹紅に言う。

「妹紅さん、少しゆっくり帰りませんか？」

「大変みたいね、新しい物は」

屋敷に戻る道中、阿求は時々不慣れからか妹紅の袖を掴むようなことがあった。妹紅が何も言わず足を止め、阿求の呼吸が整うまで待ってくれる。

不揃いながらも瑞々しい靴音が、暮方の空に溶けていった。《了》

秋
雨

屋敷を出た頃、里の上空には雲一つなく、暖かな日差しが広がっている。本来なら使いを頼むのだけれど、そういうわけにはいかない事情もあったので外へ出た。東の方には暗い色をした雲が見えていたが、まだ秋雨は降らないだろう。

馴染みの茶屋に顔を出し、新しい紅茶の茶葉を選んでいた頃、屋根に何かが落ちてくる音が聞こえだした。慌てて、暖簾から首を出してみると、前髪が少し濡れた。店主も暖簾の隙間から顔を覗かせ、二人、目を合わせた。暖簾の向こうに手を伸ばせば、冷たい雨粒が掌を濡らす。

「傘、お貸ししましょうか？」

「それは流石に……」

「でしたら、上で飲みますか？」

「お願いします……」

「急な雨ですし仕方ありませんよ。どれにします？」

「これでお願いします」

ここの茶屋は二階で紅茶と洋菓子を食べられるようになっていたが、里でそれ相応の身分

にいる私は利用したことがなかった。しかし、ここで傘を借りるかどうかと考えると、二階の席を借りる方が良いように思えた。里の者に、こういうことで借りを作りたくなかったし、下女に何を言われるか考えたくない。

階段を上がる途中で、駆け上がる店員とすれ違った。二階の窓は開け放たれたままだった。窓際に座っていた女の肩幅の色が微かに変わっていた。女は店員と一言二言話すと、同席者との会話に戻る。

二階は一階のように茶葉やカップやソーサーは置いておらず、何人かが紅茶や洋菓子を楽しめるようになっていた。二階に姿を見せると、それまで賑々しかった二階の視線が私に集中したかと思えば、一瞬沈黙が生まれ、すぐに元の活気を取り戻した。

彼女等の邪魔をしないように、目立たない端の席で紅茶が運ばれてくるのを椅子に腰掛け、待つ。足が床につかず、遊ばせると心が落ち着きをなくし、少しずつ楽しくなりはじめた。屋敷も小鈴の所も、人里にあるほとんどの住居はどれも平屋であり、二階に上がる経験はほとんどない。こうして、二階から往来を見下ろすことは今日が初めてだからだ。人々は一様に、傘をささずに雨降る中を駆ける。その中には見知った顔が幾つかあった。ずっと向こう

に見える橋の楓は少し色付いているようだった。

店員に声をかけられ、視線を戻す。熱い紅茶と苺のショートケーキがテーブルに置かれる。小さなフォークでケーキを切りながら、このまま雨が止まなければどうしようかと考える。店員の更なる厚意に甘え、傘も借りて帰ることになるのだろうか。それとも、雨が止むまでここで紅茶を嗜むつもりなのだろうか。下女が気を利かせて、傘の一本でも届けに来てくれればいいのだが、出掛ける時に店名までも告げていないため難しいことなのかもしれない。

となるとやはり、ここで雨が止むまで待つしかないのだろう。この時期の雨は、夏のようにすぐに止まない。細雨になった頃を見計らって、走って帰った方が良いだろうか。あるいは本降りになる前に走った方が良いだろうか。しかし、この熱い紅茶を一気に飲み干すことはできない。店員の厚意を受けてしまったため、無碍に扱うことはできないし、したくない。ならば、更に厚意に甘えればいいではないかと考えてしまうのだが、そういうふうに甘えるのは得意ではない。

普段ならば、こういう身の回りの買い物は下女に頼んでいる。それが彼女の仕事だ。店員の一連の行動は仕事ではない部分があるように思える。もし全てが仕事の一環であれば、傘

を借りるのも簡単だった。

こうして外に出たのは茶葉自体が切れたのもあるが、それよりも仕事の息抜きの方が大きかった。「幻想郷縁起」の編纂がどうも上手くいかない。いつまでも屋敷に籠もり、編纂を続けるのはしんどい。足はしびれ、腰が痛くなり、手も凝る。幸いなことに「幻想郷縁起」の編纂に期日はない。私が死ぬまで続けられる。ならば、少しの間、息抜きをしても良いだろう。

八雲紫や四季映姫・ヤマザナドゥに何をしているのかと訊かれても、編纂のための取材ですと答えればいい。

テーブルの端に水滴が落ちた。視線を上げると同時に「相席、いいかしら？」と声をかけられた。そこには妹紅さんの姿があった。雨の中を走ってきたのか、息が乱れ、髪にも服にも水が滴っていた。

「良かったら、どうぞ」

袂から手拭いを取り出し、妹紅さんに手渡しする。妹紅さんは一言、礼を述べ、身形を整える。

「急に降られちゃったね、今日は晴れる予定だったのよ。龍神の目だって白だったし」
「秋空は変わりやすいですから」
「困ったものね」
「全くです」
「阿求も？」
「そんなところです」
妹紅さんという話し相手を得た途端、それまで悩んでいたことが吹き飛んだようだった。思い過ごしでなければ、妹紅さんに何かと気にかけてくれている。何か悩んでいる時に、妹紅さんはよく会いに来てくれる。そうして、何でもないような素振りで何かを話してくれる。今回もそうなのだろう。
私がこんな所で紅茶を飲んでいること自体珍しく、妹紅さんがこんな所に来店するのも珍しい。妹紅さんからとってしてみれば、ただ雨止みを待っているだけなのだろうが、わざわざ人里の中心部にあるこの店を選ぶ必要はない。そんなことを改めて訊くこともなければ、妹紅さんの方から話すこともなさそうだ。そういう、何故を掘り下げるのは私達の性に合わ

なかった。理由はどうであれ、私達が同じ所で、同じ時を共有している。今もただ、私達は雨が止むまでの間、一緒に居るだけなのである。雨が止めば、私も妹紅さんも各々の役目に戻るだろう。私は屋敷に戻り「幻想郷縁起」の編纂を、妹紅さんは人里の警備か手伝いを。

しかし、今は、雨が上がっても妹紅さんと一緒に居たい。編纂のことの相談ではなく、全然関係のないことで離れたくない。稗田阿求というと人里で知らない者はいない。どこにいても、一瞬、沈黙や好奇に晒される。そういう所に生まれてしまったため仕方のないことだと割り切ろうとしても、実際にそういう場を体験してしまうと心苦しい。

身の回りのことを下女に任せてしまうのは、そういう理由も存在していた。が、全ての下女に任せる生活を続けてしまえば、一日中、編纂のために屋敷にいるだけだ。編纂が上手くいかなくなった時、屋敷の空気が変わる。そうなる前に、外に出ることも必要であった。私の日常は、「幻想郷縁起」の編纂のためでしかないわけではないだろう。

雨は依然として降り続いているようで、窓ガラスを叩き続ける。雨音とは違う、軽い音が耳をついた。妹紅さんがアイスティーにシロップを入れて、かき混ぜているところだった。細いグラスに、曇った顔が見える。妹紅さんは私の顔を見て、微笑を浮かべた。

「編纂、かしら？」

ぬるくなった紅茶に口をつけ、考えてみたがどうも答えがはっきりしない。

「自分でもよく分かりません」

「何かあった？」

「何もないから大変なんだと思います」

「何かあってほしい？」

「……それはそれで大変ですので、何もあってほしくないです」

「我が儘な悩みね」

「いけませんか？」

「良いと思うわ」

「妹紅さんはそんなことありませんか？」

「私？」

訊き返されたのが意外だったのか、妹紅さんは上ずったような声を上げた。妹紅さんにこういうことを訊くのは酷いことだろう。妹紅さんは老いることも死ぬこともない。私が思っ

ているよりもずっと沢山のことを経験している。私の悩みなど、ずっと前に体験していることに違いない。今もそういう悩みを持っているかもしれないが、それを面に出さないのは、長年生き続けた知恵の成果なのかもしれない。

「沢山、あったわよ。でもね、嬉しいこともあったのよ。阿求もあるでしょう?」

「ええ、まぁ、少しは……」

「でしょ?　それにね、こんなことを教えてくれた人だっているのよ。『そんなに気分が沈むのは雨だからさ』ってことよ。だから、阿求もそうなのよ」

そう言われると、そんな気がする。確かに晴れている時にこんなことを考えないし、考えたところですぐに切り替えられる。妹紅さんが言っていたように、嬉しいことやこれからの楽しみを考えてしまう。しかし、妹紅さんにそんなことを言えるとは余程の者なのだろう。

「誰がそんなことを?」

「あなたよ」

「私はそんなこと言ってませんよ」

「言っていたのよ、八代目の時に。あなたは覚えていないかもしれないでしょうけど。私は

覚えているのよ」

妹紅さんは頬を綻ばせ、アイスティーを飲む。その顔を見ると、不意に妹紅さんの嬉しいことの中には私もいるのではないかと思った。

出会い、別れ、また出会い、別れる。その繰り返し。それが妹紅さんと私達御阿礼の子の常。けれども、その出会いと別れの中で生じるものは同じではない。どこか重なり、どこか違う。私達が悩み、妹紅さんが悩み、私達が笑い、妹紅さんが笑う。私達が妹紅さんを助け、妹紅さんが私達を助ける。どちらか一方が支えられるのではなく、振り子のように支え合う。そういう三十年を、妹紅さんは密かに楽しみにしてるのではないだろうか。

そう考えると堪らず可笑しくなって、頬を綻ばせた。でも、そんなことを考えるとある一つの疑問に辿り着き、固い声を上げた。

「妹紅さんは私とまた出会えて、良かったですか？」

「良かったわ。また、楽しくなるわ」

「三十年しかありませんよ？」

「それだけあれば十分よ」

「どうしてそう言えるんですか？」
「私には、あなた達にはない時間がある。先代も先々代も知っている。あなたのいない百年を知っている。だから、大丈夫よ。信じられない？」
　妹紅さんにそう言われると否定できなくなる。
「……ずるいです」
「あなた達が悲観的だからね」
「妹紅さんもそう思うことだってありますよね？」
「その時は頼りにしてるわ」
　続けて問おうとしたのを遮るように、妹紅さんは窓の方へ目を遣った。
「止んだわね」
　地面にできた水溜りに雨粒は降ってこない。通りを歩く人間は傘を閉じている。
「そろそろ行きましょうか」
　妹紅さんは重い腰を上げた私の手を取り、そのまま一階へと降りる。声をかけても、妹紅さんは聞こえないふりをする。諦めて、導かれるまま導かれた。店を出た時、妹紅さんの手

には一本の傘があった。私の屋敷にある傘だった。
「その傘、私のですよね？」
「屋敷に行った時、頼まれたのよ」
妹紅さんの返答に頬が膨らむ。持ってきてくれたのならば、上で会った時にそう言ってくれれば良かったではないか。そうすれば、嫌なことを考えずに済んだ。妹紅さんに言いたいことが一つ、また一つとわいてくる。しかし、誰かに聞かれるのは好ましくない。妹紅さんが屋敷に用があると言ったのだから、その時に言おう。
「今ちょっと怒ってますからね」
「うん、よく知ってるわ」
「私に用事があるようで好都合です」
「もうなくなったって言ったらどうする？」
「知りません、そんな事情」
妹紅さんが逃げないように強く手を握り、真っ直ぐ屋敷へ帰る。引っ張られる形となった妹紅さんは困ったように笑った。そんな妹紅さんが面白くなってこっちまで可笑しくなって

きた。
「お説教は短くお願いね」
「いいじゃないですか、長くても。もっと長いのは聞かなくていいんですから」
「だから短い方が良いのよ……。ね、何とかならない？」
「なりません」
「あなた達ってどうしてそういうところで頑固なのかしらね……」
「私は私ですから、そんな昔のこと知りません」
「ごめんなさいね、昔話が多くて」
「悪い癖ですよ」
「仕方ないじゃない、おばあちゃんなんだから」
「じゃ、沢山、昔話してください。私、そんな昔のこと知りませんから」
「仕方ないわね、長いわよ？　なんたって、千年あるんだから」
「構いませんよ、全部覚えられますから」
「話すこと、選んでいい？」

「駄目です」

妹紅さんとそんな話をしながら秋晴れの中を歩き続けた。《了》

夢の続き

一

ある冬の夜のことであった。稗田阿求は布団の中で何度目か分からない寝返りを打った。梢に止まった野鳥の鳴き声が聞こえたかと思えば、廊下が軋む微かな音を捉え、寝床の前に誰かが待っているような感覚に陥り、そっと障子を開ける。

するとそこには数刻前と変わらない濡羽色の夜空が広がっていた。少し高い所に上った三日月の周りには、幾つもの星が煌めいている。夜風が素足を撫で、障子を閉め、布団に潜り込んだ。しかし、全然眠れる気がしない。

阿求が寝られなくなったのは、今夜が初めてではない。「幻想郷縁起」の編纂を終えた時分から眠りが浅くなり、朝だろうと目覚めた時には、まだ四方は夜の帳で包まれている時分であったり、東雲の時分であった。そんなことを気にかけていると眠っている時間が少しずつ短くなり、いよいよ床に就いても眠れなくなった。

白昼に微睡むことが多くなり、女中に起こされるようになった。寝ている阿求を気遣うような遠慮がちな声音ではなく、生きているのを確認するような切迫したものだった。

御阿礼の子は「幻想郷縁起」を編纂するために転生を繰り返している。となれば、編纂を終えた頃から、旅立つ準備をしていると考えてもおかしくない。しかし、転生の準備を終えていないのに、亡くなるわけにはいかない。

永遠亭に文を出したのが一昨日だが、返事はまだ来ない。寝る間を惜しんで何かやりたいことがあるわけでもなく、今は一日でも多くの時間を生きたいと願っているだけだ。転生の準備を終えていないから、という編纂からの陸続きの願いではない。

この願いには、先代の御阿礼の子が、流行りの病で夭折したり、編纂の途中で亡くなったりしていることが関わっている。彼等が何をしたかったのかは、断片や手記、「幻想郷縁起」の独白でしか分からない。そこから更に考えを巡らせ、彼等がどのように己の人生を歩んだのか改めて知るつもりはない。

しかし、知ってしまった以上は、彼等の思いを受け継がなければならないような気がする。しかし、そうなってしまえば、阿求の生は阿求の生と呼べるのだろうか。九代目御阿礼の子という肩書きだけで十分なのではないだろうか。

阿求が阿求らしく己の生を歩まなければならないのではないだろうか。転生の準備という

ものは、の編纂を終えた御阿礼の子が、御阿礼の子という名に縛られることなく生きることなのではないだろうか。

頭は夜が深くなるにつれ、真昼の時のように鮮やかに動きはじめ、目も冴え渡る。眠るのが勿体ないように思えてきた。寝間着から小袖に着替え、羽織を重ね、洋灯を手に、縁側を通り、書斎へ向かう。

垣根の向こうにある人里は夜気を揺することなく眠っている。御阿礼の子として代々、姿を変え、人里や人間の平穏を見守ってきているが、博麗大結界を始めとした八雲紫と博麗の巫女の活躍により、阿求の役割は先代達と比較して随分と穏やかになった。「幻想郷縁起」という書も人間を守るというよりも、御阿礼の子が生きるために編纂が続いていくようだった。

書の在り方も変り、生きられる時間の中には、阿求個人の時間も出てきた。九代目である阿求の生き方は、十代目や十一代目といった次代の御阿礼の子達の生き方の指針となるべき代なのではないだろうか。

書斎の明かりを灯し、博麗大結界が張られてからの御阿礼の子の生き方を文にまとめる。

朝になれば、永遠亭から返事が来るか、遣いの者が飛んでくることだろう。そうなれば、ぐっすりと眠れるはずである。

朝が来た。女中の慌ただしい足音が屋敷に響く。阿求は抽斗にしまった白粉と頬紅を取り出し、来訪に備える。

「阿求様！」

「何ですか、早朝から」

書斎へ入ってきた女中は、涼しい阿求の顔を凝っと見た後、惟みた後に念を押すように低い声で訊く。

「寝られましたか？」

「ええ、少しだけですが」

「朝ご飯は、もう召し上がりますか？」

「お願いします」

朝食の後、鈴仙が書斎へ来た。手には、小さな風呂敷包みを持っており、阿求はようやく眠りが返ってくると思い、安堵の笑みを浮かべた。

小包みを指した指先が微かに震えていた。阿求は驚くことなく寝不足のせいであろうと判断したが、鈴仙は目を瞠る。

彼女の胸中には、果たして本当に寝られないために薬を依頼したのであろうか、という不審感が渦巻いていることだろう。編纂を終えた今、阿求がこの世界に留まり続ける必要はない。転生の準備を終えているのであれば、苦しまない方法として薬を選択した可能性もある。

先代の中には、編纂を終え、服毒自殺をした者もいるため、鈴仙がそういう不審感を抱くのは当然過ぎるほど当然だった。

あるいは、病の予兆として捉えたのかもしれない。阿求ぐらいの年齢を迎えると、心身の不調を訴える者が多かった。手足の震え、食欲不振、頭痛、言葉がうまくまとまらない、物事を思い出しにくくなる。薬を処方して、阿求の限られた時間を縮めてしまう可能性はないだろうか。

「転生の準備を終えてないんですよ、まだ死ぬわけにはいきません」

「転生の準備の途中で死んだのもいるみたいじゃない」

「彼は関係ありませんよ」

「でも、同じ御阿礼の子じゃない」

先代と阿求が全くの無関係であるとは言い切れない。阿求の生は阿求個人の生でありながら、御阿礼の子の生でもある。先代の記憶も失い、記録でしか知ることのできない彼等と同じ存在である。

「眠っている間、私達の脳は、記憶を整理するって聞いたことありますか？」

「あるわよ」

「昨晩、寝られなかったので、八代目である阿弥の記録を読んでいました。そこに、こんな記述がありました。私達の求聞持、見たことを忘れないというものが、整理の邪魔をしているのではないか、と」

「整理することも覚えている、ってこと？」

「可能性としては十分では？」

「……寝る前に一つだけ服薬してちょうだい」

鈴仙が包みを解く。中には薬籠が入っており、蓋を取ると白い錠剤が幾つも入っている。

「眠りやすくなるお薬なんですか？」

「三十分から一時間程度したら効いてくると思うわ」
「どれくらいの間、効くんでしょうか？」
「八時間程度だけど、起きた時に残っているかもしれない。おかしいなって思ったら、すぐに連絡をして」
阿求の脳内には、先代の御阿礼の子の記憶の欠片も存在している。その記憶が整理されるとなれば、阿求の記憶と混じり合う危険性があるのではないか。幻が見えたり、聞こえたりする可能性はないのだろうか。そして、忘れられないとなれば……。
先代の記憶は、本来ならば、阿求の脳内にあってはならない異物である。脳はどのように処理し、整理するつもりなのだろうか。眠っている間に脳が異常を来すことがないとは言い切れない。
阿求は急速に先代の服薬自殺を肯定しそうになった。しかし、彼の時代の「幻想郷縁起」と阿求の時代の「幻想郷縁起」は性格が異なり、その書の必要性が問われることとなるだろう。御阿礼の子が存在しなくとも、「幻想郷縁起」がなくとも、幻想郷の人間達が生きられるのであれば、それで良いのではないだろうか。

しかし、この問いに答えるのは九代目では尚早だろう。もっと先の御阿礼の子に課せられるものである。今は、転生の準備を終えるために生きることを優先するべきだろう。

その日の夜、言われた通り、一錠だけ薬を飲んだ。布団で横になっていると阿求の不安を余所に、指先が微かに熱を帯び、瞼が重くなっていき、まるでこれまでの日々が戻ってきたかのように穏やかな眠りへ落ちた。

翌朝、垣根の向こうから響いてくる鶏の甲高い声で目が覚めた。車夫達の大きな声や屋敷の中で水を撒く音も聞こえてくる。

起き上がってみようとしたが、足に違和感がある。力を入れて動かしてみようとするも、全然力が入らない。

鈴仙の言っていた通り、まだ薬が残っているのだろう。阿求は薬が抜けるまで、布団で横になった。

薬で眠ることが続けば、毎朝、こうして感覚が戻るまで横にならねばならないのだろうか。薬が残る量は毎回決まっているのであろうか、毎晩服薬することによって、体内に蓄積される量が増え、歩けなくなる日を迎えてしまうのではないだろうか。

この頭も、少しずつ動きが鈍くなってしまうのでないかと思うと、薬に頼って眠ることが恐ろしくなった。刻一刻と死に近付くのが、生きているのにも拘らず死んでいるような感覚に襲われる。

布団から這い出て、何とか立ち上がろうとするが両足が震え、布団へ崩れ落ちる。薬が完全に抜けるまで、阿求は再び眠った。

微睡みの中、誰かに呼ばれているようだった。指先に温もりを感じる。白く、長い指が、阿求の小さな指と絡まっている。この温もりに触れていると心が落ち着き、全ての心配事が全身から抜け、身体が軽くなる。

女中が心配になって様子を見に来たのだろうが、彼女の指はこんなに長くなく、あかぎれやささくれがある。

阿求は慌てて身を起こした。背中にかけられていた布団が畳に滑り落ちた。辺りを見渡すと、目の前に柔らかい笑顔を浮かべる藤原妹紅が座っている。

阿求は耳まで熱くなるのを覚え、取り繕ったように不器用に笑う。

紫檀の机には昨晩服薬した薬籠があり、その側に空になった紅茶茶碗が置いてある。どれ

ほど前から、妹紅は阿求を待っていたのであろう。妹紅は阿求が目覚めるまでの間、ここで待ち続けていたのであろうか。阿求の寝顔を見ながら。

「おはよう、よく寝ていたみたいね」

阿求は羞恥と安堵を交互に味わい、妹紅に何と言っていいのか分からず、そもそも何故、妹紅がここに居るのかすら分からず、寝床には余所余所しい沈黙が落ちてきた。

妹紅は阿求が大いに慌てているのを察すると、優しい調子で答える。

「下女から、阿求の様子を聞いてね。見に来たのよ」

「何も聞いてません」

「秘密にしておいてほしい、って頼まれたからね」

「それでも、一声かけてもよかったじゃありませんか」

「優しい嘘は残酷なのよ」

二度目の沈黙が落ちてきた。妹紅は深い笑みを浮かべ、自身の膝を軽く叩く。

「もう少し、眠る？」

「今日はしっかりと寝られました」

「来客に気付かないほどね」
阿求は拗ねたようにそっぽを向き、女中を呼び、着替えと二人分の軽い朝食を用意するように頼んだ。
「妹紅さんはもう朝食を食べられましたか？」
「まだだけど？」
「でしたら、一緒にどうですか？」
妹紅と一緒に遅い朝食を摂りながら、眠れないことを打ち明けるかどうか悩んだ。妹紅ならば、先代達と会い、眠りについて何か相談を受けていないだろうか。阿求は朝食後の紅茶を飲みながら、尋ねた。
「知っているかもしれませんが、最近、よく寝られません。先代から何か相談を受けたりしていませんか？」
妹紅は紅茶を飲む手を止め、意外そうな声を上げる。
「私が？　そこは、永遠亭じゃない？」
「永遠亭に行ったような記録はありませんでした」

「そうは言われてもあんまり覚えていないのよねぇ、百年近く前だから。阿求は何か覚えてないの？」
「覚えてません」
「思い出せない？」
「思い出す？」
聞き返した阿求に、妹紅は驚きを示した。阿求と妹紅の間で、御阿礼の子の記憶について異なる部分があるらしい。
「どういうことでしょうか？」
「阿弥が言っていたのよ。『先代の記憶の大部分を失っているだけで、全てを失っているわけではない。ということは、何かがきっかけとなり、思い出すことも可能なのではないか』って。実際、阿弥は阿七に関することを思い出たらしいわ」
「そんなの記録にありませんでした」
「筆マメじゃなかったら仕方ないわ」
「大事なことは記録に残してくれないと困ります」

「自分のことは記録に残したくなかったのよ」
「……困った男ですね」
「ええ、全く」
阿弥のことを話す妹紅の顔は自然と柔らかくなり、優しいものだった。阿求と話している時とは違う、妹紅でありながら全然妹紅ではない別の女性と話しているような気分になり、楽しくない。
阿求の内に、阿求とは違う男の影を見られているようで穏やかになれない。同時に、阿求が見てはいけない妹紅の顔を見てしまったようで、胸の端が痛くなった。阿弥が記録を残さなかった意味が分かる。次代よりも大切にしたいことがあった。
これ以上、阿弥のことを、阿弥と一緒にいた妹紅のことを知るのが恐ろしくなり、話を断ち切るように欠伸を零した。
「もう少しだけ休みます」
「阿求……？」
「妹紅さんが言ったんですよ」

阿求は妹紅を独占するかのように、彼女の膝の上で横になる。見上げると目を瞠る妹紅の顔がある。

妹紅が温かいせいであろうか、彼女の側にいると自然と安心した。きっと、妹紅が御阿礼の子という存在を知っているからであろう。

しかし、幾度となく転生を繰り返し、姿も名前も違うけれども、「幻想郷縁起」という書の編纂を続けるこの身を、妹紅はどう思っているのだろうか。

阿求としては、不老不死である妹紅と知り合えたのは嬉しいことである。先代との関係ということを除いても、これからも御阿礼の子を知っている存在が一人でも幻想郷にいることが嬉しい。

「妹紅さんは、私達に会って、どうでしたか?」

「どうって?」

「その、嫌じゃないんですか?」

妹紅と初めて出会った時、無視をされたのは鮮明に思い出せる。「幻想郷縁起」のためと伝えても、変わらないわと一蹴された。そんな冷たい関係だったはずなのにも拘らず、こう

して屋敷に訪れるようになり、息が届くほど近くにいる。

一体、妹紅の胸の内にどのような変化があったのか分からない。深く踏み込む気もなかった。三十年も生きられないのであれば、誰とも深い関係にならない方が良い。しかし、ならばどうして、同じように短命である阿弥が、妹紅の内で、まるで特別な存在としているのであろうか。

そのことを考えると生じるこの胸の苦しみは……。阿弥の記憶が阿求の記憶のどこかで眠っている証拠なのであろうか。

妹紅はずっと遠くを見て、訥々と語り始めた。見上げる瞳は柔らかい光を受け、輝いていた。

「……嫌、だったのかもしれないわね。でも、あなた達は変わらず、私の元に来た。『幻想郷縁起』のために、毎回、来た。それが何だか嬉しかったのよ」

「嬉しかった？」

「皆、私を忌み嫌う。でも、あなた達は、たとえそれが役目であろうと、不老不死だから何一つ変わらないのに、律儀に来た。それが、それが……」

阿求の頬に、温かい雫が落ちてきた。妹紅の膝を離れ、肩を震わせる彼女を優しく抱きしめ、不安を消し去るように囁く。

「妹紅さん、大丈夫ですよ、大丈夫です。私達はここにいますよ。ずっと、ここにいます」

発作的に涙する妹紅を励ます言葉を、阿求は沢山持ち合わせていない。彼女が涙している本当の理由も分かっていないかもしれない。改めて尋ね、辛い記憶を思い出させたくない。妹紅の涙を見たくない。

「妹紅さん、忘れてください。全てを忘れて、また……」

「でも、それで、阿求が……」

「大丈夫ですよ、また思い出します」

肩に伸びた妹紅の手に力がこもる。妹紅は寝床の机に置いてあった薬鑵を思い出したのか、溢れ出る言葉を堪えているようだった。

妹紅のことを思い出すことが、どれほど危険なことなのか分からない。どれほどの断片が、頭の中をさまよっているのか分からない。安らかな眠りの中で、その一つ、一つを確認していけば、全てを思い出せるのではないだろうか。

「妹紅さんと一緒にいると、何だかすごく安心するんです。今日だけ、一緒に寝ませんか？」

その日の夜、寝床には二組の布団が敷かれた。阿求は寝る前の薬を飲まなかったが、平静を味わっていた。隣に顔を向ければ、妹紅は顔を強張らせ、沈黙を保っている。阿求は起き上がり、そっと声をかけた。

「起きてますか？」

「早く寝なさいよ」

「眠るって、記憶を整理するみたいですね」

布団から飛び起きると思っていた妹紅は静かに笑うだけだった。

「阿弥から聞かされてましたか？」

妹紅は眠ったのか返事はない。阿求も眠ろうとしたが、妹紅の透けるような白い横顔を見て、触れるように自らの唇を落とした。

妹紅は待つことしかできない。阿弥から阿求へ、阿求から次の御阿礼の子まで、その間を待つことしかできない。阿求は妹紅を再び、一人にしたくなかった。しかし、それでも、一

人になってしまうのが妹紅と阿求であった。
　そんなことを考えていると、眠っていたはずの妹紅の手が阿求の頭へ伸びてきた。
「何も考えなくていいから、休みなさい」
「妹紅さんは……」
「明日の朝、全部聞いてあげるわ。今は、ただ、寝ましょう？」
「思い出してほしいんですね」
「……うん」
「それは、私達を愛していたからでしょうか？」
「今も愛しているからよ。互いに生きられる時間を精一杯、生きて、生きましょう」

二

　こんな夢を見た。
　男が縁側に佇み、庭に花開く大輪の百合を見ている。隣には、すらとした品の良い女が腰掛けている。男が不意に口を開けた。

「俺は、もう少しで死ぬかもしれない」

女は何とも答えなかったが、袖から覗く男の細腕や頬の痩せた様子を見ると、死ぬのだろうと思わざるを得ない。女もそう思ったのか何も言わず、張りのある潤んだ瞳で、もうすぐ側を離れる男を見ていた。

女の瞳に映る男の姿は鮮やかだったが、少しずつ幾重に別の姿を有し、男なのか男ではないのか分からなくなる。

男は慰めるように女の頭を撫でたが、女は長い睫毛の間から涙を零し、頬を濡らす。男は思い切ったように声を張り上げた。

「ここで待っておいてくれ」

「今度は何年待てばいいの？」

男と女の間には、数え切れない時の隔たりがあった。男は百年程度だと思っているのだが、女にとってはもっと長い時であろう。その内に、女は何人もの男と出会い、手伝い、受け入れ、また別れたことだろう。

男は女の側を離れたくはなかった。しかし、男は女のように長い時間を生きられない。

「百年待ってくれ」
女は頷いた。それから、震える声でこう言った。
「ねぇ、あなた、覚えている？　私に愛しているって言ったこと」
「忘れもしない。でも、それは、子供のような遊びじゃなかったのか？」
「ええ、子供の夢みたいよ。私は死なない、あなたは死ぬ。だから、愛情なんて、寂しくなるだけよ。それでも……どうしてかしら、それでも……」
「九代目にその愛を注いでやってくれ。俺にそうしてくれたように。乙女だったら尚更だ。腕っ節もないだろう、編纂のこと以外にも沢山のことを考えるだろう。支え合って生きてくれ」
「……あなたがいない間に忘れるかもしれないわ」
「その時はその時だ。でも、きっと、九代目が思い出すよ」
「どうして？」
「お前が俺達を愛してくれたからだ」
それだけを言うと、男は女の膝に頭を落とした。女は一切を否定できなかった。

女はその夜から、この広い屋敷で一人になった。男の言ったように九代目の子が来るのか分からなかった。女はそれでも、もしもを信じた。九代目が来た時のために屋敷の掃除を始めた。畳を磨き、廊下を磨き、柱の埃を落とし、庭を整え、瓦を新調する。

一つ、二つと勘定していた唐紅の天道もいつしか数えなくなり、ただ待ち続けるようになった。傍らには、掃除の間に見付け、屋敷の蔵にしまおうとした数々が物があった。女はその全てに並々ならぬ感情をいだいた。その全ての物には、男達との思い出があったのだ。

一つ、また一つと女は思い出を胸に待ち続ける。思い出すことに疲れると庭を眺め、今を確認した。

百合が枯れ、楓が色付き、葉を落とし、椿が開き、梅が散り、桜が開き、新緑が芽生え、また百合が開く。女は待ち続けた。

そうしていると、ある日、一人の少女が女の前に立った。はにかむ笑顔が、男によく似ていた。男ではない、初めて出会ったあの少女によく似ているのだ。

「稗田阿求です」

女はこの時、ようやく百年が経ったのだと思い出した。《了》

77　夢の続き

和歌四首

久方の雨浴び落ちる花の色共に揃ってまたまみえむかな　阿求

短夜の流れる星に夢願う静かに眠る常夏の花　妹紅

天の原富士懸かる月先代の眼に見えき同じ月かな　阿求

年の瀬に火鉢囲いて語る夜来る年歩む同じ道なり　妹紅

注釈

○久方の：枕詞。「雨」にかかる。○色：色合い、色彩。○共に：短命である稗田阿求が、藤原妹紅と共に。

あの花が散り、また春を迎えると再び花開くように、私達もまた二人揃って見れるのでしょうか。

○常夏の花：なでしこの異称。○なでしこ：なでるようにかわいがっている子の意で、愛し子。

短夜を流れる星に一刻でも早く眠られるように願っている私の隣では、撫子が静かに眠っているよ。

『和漢朗詠集』二五八番（詠み手：阿倍仲麻呂）の本歌取り。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かな」（大空をはるかに仰ぎ見るとそこにあるのはかつて春日の三笠の山に出ていたのと同じ月なのだなぁ）。○天の原：広々とした大空。「富士」にかかる。○懸かる：（目や心に）とまる。つく。

大空に聳える富士に見える月は、先代の眼に映った月と同じ月なのだろうなぁ。

年の瀬に火鉢を囲い阿求と話す夜。正月も正月を終えた後の春も今と同じように共に歩むことになるのだろうなぁ。

二星

二星其一　二星　その一

良宵白月旧亭囲　良宵（りょうしょう）　白月　旧亭を囲う

清暁流星碧葉枝　清暁（せいぎょう）　流星　碧葉の枝

紅頬泣珠繊手染　紅頬（こうきょう）　泣珠（きゅうしゅ）　繊手（せんしゅ）を染める

多年唯願合歓為　「多年　唯願う　合歓と為（な）すを」

○良宵・清暁一句　対句。起句に動かざるものを中心に据え、承句に動くものを中心に据えた。○良宵：穏やかによく晴れた夜。○旧亭：小さな古い東屋（あずまや）（東屋：眺望に優れている簡易な休憩所）。○清暁：爽やかな明け方。○紅頬：（稗田阿求）の紅い頬。○泣珠：（稗田阿求の）涙の美称。○繊手：しなやかな手。○多年：多くの年月。○合歓：喜びを共にする。○為す：変化する。

ある穏やかな晴れ、白く輝く月がよく輝いている。稗田阿求と藤原妹紅は、東屋で様々なことを話し合った。

そうしている次第に空は明るくなり、流れ星が青々とした葉の先に駆ける。

阿求の紅い頬に玉の如し涙が流れたではないか。阿求は自らの手で涙を拭いながら、妹

紅にこう言う。

「これからの日々のことを願っていたんです。私と妹紅さんが喜びを共にできるようになればいいのに、って」

二星其二　二星　その二

秋懐暮入雁群飛　秋懐（しゅんかい）暮（くれ）に入（い）り、雁群飛ぶ
楓樹寒蝉細菊垂　楓樹（ふうじゅ）　寒蝉（かんせん）　細菊（さいぎく）から垂る
小院胸中千里夢　小院（しょういん）　胸中　千里の夢
鴛鴦我意遂無移　鴛鴦（えんおう）　我意（が）（い）　遂に移ることなかれ

○秋懐：秋の思い。○暮入：夕暮れになる。○雁群：雁の群れ。○楓樹：楓の木。○寒蝉：蜩の意。○細菊：小さな菊。○小院：小さな我が家。○胸中：胸の内。○千里の夢：極めて長い夢。転じて、叶わないであろう夢。『夢』の内容は結句にて。○鴛鴦：おしどり。仲の良い夫婦のたとえ。○我意：自らの心。○遂に：最終的な結末を意味する。○無：禁止を意味する。

藤原妹紅は秋になっても、あのことを懐いていた。

暮れになり、雁の群れが飛ぶ。楓の木に止まり鳴いていた蜩が、小さな菊へ移り、命尽きたように地へと垂れている。

我が家に帰り、こう思う。

鴛鴦のように、私の心が、阿求から離れなければいいのに。しかし、阿求の生は私の生から離れてしまうのである。

二星其三　二星　その三

朝来雪灌双鷺啼　朝来（ちょうらい）雪灌（ゆきそそぎ）双鷺（そうろ）啼く

庭戸残花露不支　庭戸の残花　露を支えず

長路故人安在待　「長路（ちょうろ）　故人　安（いず）くに在（あ）りて待つや」

東河還発又孤持　「東河　還発（またひら）き、又孤（こ）として持（じ）す」

○朝来：朝早く。○雪灌：雪が激しく降る。自然の厳しさ、運命の残酷さの象徴。○双鷺：二羽の鷺。転じて、稗田阿求と藤原妹紅を指す。○庭戸：庭。○残花：散り残った花。

冬になっても残っている花。起句の雪を承ける稗田阿求を指す。○長路：長い旅路。稗田阿求の人生を指す。○故人：昔からの友人。○安くに在りや：場所を問う反語。○東河：東の河。此岸の意。西方を彼岸と意味するところから。○還発く：また花が咲く。次代の御阿礼の子を指す。○持す：守り支える。

雪が激しく降る朝のことであった。二人は阿求の家で暖を取りながら、夏の夜のように話していた。

庭に残っていた花が、いよいよ重さに耐えられず、倒れた。

「私の長い旅路を果て、昔からの友人はどこにいるだろうか」と、阿求は花を見て、言った。

妹紅は阿求の言葉を聞き、こう返した。

「ここでまた花が開くように、また一人で同じように守り支えるよ」

二星其四　二星　その四

平川独蝶乱如糸　平川（へいせん）独蝶（どくちょう）糸の如し乱れる

折柳西江寂静姿　折柳（せつりゅう）西江（せいこう）寂静（せきせい）の姿

画閣夭娘浮世去　画閣の夭娘　浮世を去る
今時吟歩幾相思　今時　吟歩　幾たびか相思う

○平川：平坦な川原。○独蝶：一匹の蝶。霊の象徴。人の霊が死後、蝶に変わる伝承（荘氏『胡蝶の夢』など）から。○折柳：中国に、折楊柳という習慣がある。柳の枝を折って、はなむけとしていた。日本の魂結びと同じく、旅人が旅に疲れて魂を散らさないようにしっかりと繋ぎ止める、という意あり。○西江：西から東へ流れる川。西には、仏のいる極楽、という意味がある。そこから流れている川、という意。○寂静：静か。○画閣：美しい色彩を凝らした家。○夭娘：早死にした娘。稗田阿求を指す。○浮世：儚いこの世、人生。○今時：今、現在。○吟歩：吟じながら歩く。転じて、話をしながら歩く。○相思う：互いに思う。

川原で、一匹の蝶が糸の如し乱れながら飛んでいる。
折柳が西の方から流れてくるのが見える。誰かが、旅立ったのだろうか。
阿求はその短い生を全うし、浮世を去った。
今、こうして蝶や折柳を見ながら話したいと幾度も互いに思っているのに。

押韻：上平声四支（枝、為、垂、移、支、持、糸、姿、思）、上平声五微（囲、飛）、上平声八斉（啼）の通韻。《了》

流転

流転　流転

千年女哭訃音迷　千年　女哭　訃音に迷う
一刻児歓性命斉　一刻　児歓　性命斉し
春曙鶯花家舎満　春曙　鶯花　家舎に満ち
秋風杜宇索居悽　秋風　杜宇　索居を悽む
炎光夏月凝脂搦　炎光の夏月　凝脂を搦め
寒気隆冬玉指締　寒気の隆冬　玉指を締む
永世送君還共会　永世　君を送り、還た共に会う
何時互見再倶梯　何時　互いを見て、再び倶に梯す

【注釈】

○千年一句：次句との対句。「千年」と「一刻」、「女哭」と「児歓」、「訃音」と「性命」、「迷」と「斉」が対となっている。それぞれ、長い時と短い時、悲しみと喜び、死と生、女の状態と児の状態となっている。

この対句は藤原妹紅と御阿礼の子の生と死、人生を描き、生きることの無常を表現している。

律詩の起聯は本来ならば、対句しなくても良いのだが、本律詩は全対格、すなわち、全句が対句となっている律詩のため、対句を用いていた。

○千年：長い間。数の名ではなく、数の多いことを示す言葉。　○女哭：女が泣く。大声を上げて、泣く。この「女」は藤原妹紅を指す。　○訃音：訃報。次句の「児」の訃報を意味している。　○「迷」：「児」の訃報を受け、何をすればいいのか分からず、迷っている様子。

○一刻：短い間。「女」の「千年」と対となっている「児」の生を短さを意味している。○児：稗田阿求を含めた御阿礼の子を指している。　○歓：よろこぶ、なごやかに楽しむ。御阿礼の子が短い生を楽しんだ、意。　○性命：生命、命。御阿礼の子の生。　○斉し：きちんとそろう、大小、長さ、行為などが、ちぐはぐすることなくそろう。御阿礼の子が己の課せられた使命である「幻想郷縁起」編纂を終え、生を全うした、意。

○春曙一句：次句との対句。「春曙」と「秋風」、「鶯花」と「杜宇」、「家舎」と「索居」、

「満」と「悽」が対になっている。それぞれ、季節、動物、場所、場所の状態となっている。

○春曙：春の明け方、夜明け。　○：鶯花：鶯と花。中国と「花」といえば、牡丹を指すことがあるため、本作でもその意として用いている。すなわち、鶯と牡丹。また、「鶯」には、美声、声の美しい女声の形容に用いることもあり、「牡丹」も、はなやかで大きなものの形容とあり、この二語は短に春の景色を詠っているのではなく、阿求の声と妹紅の姿を指しているいわゆる掛詞を表現として採用している。○家舎：阿求の屋敷。　○満：屋敷に鶯花が満ちる、すなわち、阿求や妹紅が談笑している様子を指している。

○秋風：秋に吹く風。また、「秋」には大切な時、という意味もある。　○杜宇：ほととぎすの別称。「杜鵑の吐血」という故事、杜鵑の口の中が真っ赤なこと、その啼き声が甲高い、といった杜鵑の象徴から、杜鵑のように声をかける妹紅を指している。これも、前句「鶯花」同様、掛詞である。　○索居：寂しい屋敷。同じ所に居るのに拘らず、春のような時ではないこと。　○悽：心が痛む、悲しむ。

○秋風一句：春と秋を詠った対句と読むこともできるが、その実は、「春曙」と「秋風」、「鶯花」と「杜宇」、「家舎満」と「索居悽」が対になっている。それぞれ、季節、人物、心

情という寓意と対句になっている。この対句は、心情と時の無情さを表現しようと試みた対句である。

○炎光一句：次句との対句。「炎光」と「寒気」、「夏月」と「隆冬」、「凝脂」と「玉指」、「搦」と「締」が対になっている。それぞれ、寒暖、季節、身体、行為となっている。

○炎光：暑さ。　○夏月：夏の間。　凝脂凝脂：白く滑らかな肌のたとえ。『長恨歌』より。

搦：そっと手にとる。

○寒気：寒さ。　○：隆冬：真冬。　玉指：「玉」は宝石のようにすぐれていて美しい、という形容。すなわち、指を形容している。

○寒気一句：春曙・秋風の対句と比べると、簡素な対句であるが、掛詞を中心とした難読極まりない対句と簡素で分かりやすい対句、という対句になっている。

○永世一句：次句との対句。「永世」と「何時」、「送君」と「互見」、「還」と「再」、「共会」と「倶梯」が対になっている。それぞれ、時間、行為、再会、行為となっている。

○永世：ながい間。ここでは、妹紅の不老不死を指している。　○送君：「君」は、御阿礼の子を指している。不老不死である妹紅は、永世、御阿礼の子を見送る、という意。

○還：円をえがいてもとへ戻る。次句の「再び」と同じ意味。行ったものがもとの場所へ戻る。　○共会：妹紅と御阿礼の子の再会の意。

○何時：何れの時か、疑問の意。見互：妹紅と御阿礼の子が顔を合わせることを指す。○再び：ふたたび、もう一度。　倶梯：「梯」には、もたれかかる、寄りかかる、という意味がある。すなわち、妹紅と御阿礼の子が共に寄りかかり、もたれかかりながらも生きる、という意。

○何時一句：永世一句との対句であるが、意味上では、丁度、起聯と対になっている。起聯で、妹紅が御阿礼の子の死を受け止めきれないのに対し、結聯では死を受け入れた上で、どのように御阿礼の子と生きようか、と決意している。

○押韻：上平声「八斉」（迷、斉、悽、締、梯）。　○詩形：七言律詩。

【訳文】

不老不死である藤原妹紅が、稗田阿求の訃報を聞き、大きな声で泣いている。阿求が亡く

なった今、一体どのようにして生き続ければいいのだろうか。

阿求を初めとした御阿礼の子が短命であることは共に知っていたのに拘らず、笑顔で生きようとした彼女の生き様を間違っていると否定できようか。

出会い、語らい、互いの家を行き来した春。これまでの時が寂しいほどに吹き荒ぶように「幻想郷縁起」の編纂を続ける阿求を気に掛けようようとして止められなかった秋。

茹だるような暑さの中で倒れた阿求を運んだ夏。厳冬が過ぎるのを指を絡め待った冬。

妹紅は阿求だけではなく、その次の御阿礼の子も、またその次の御阿礼の子も見送り、そしてまた新しい御阿礼の子と出会うことであろう。

そして、また、失わずに受け継がれた記憶を糧に、妹紅と共に生きるのである。《了》

幸福な死

紫檀の文机の一番下の引き出しに、メディスン・メランコリーから授かった薬と八意永琳から授かった薬が、一つの硝子瓶に混じっていることを知っているのは、稗田阿求ただ一人だけだった。

阿求がメディスンに永琳から授かっている薬と瓜二つの薬を作ってもらうように頼んだのは、『幻想縁起』の編纂を後少しで終える冬のことであった。

阿求は常日頃飲む薬の中に、全く同じ色や形をした毒薬を混ぜることによって、誰にも見つからず、阿求の記憶力があったとしても瞬時に薬か毒か分からないようにして、いつでも死ねるようにしたのである。

薬をはじめ阿求の肉体に関することは、八意永琳から使いとして訪れる鈴仙・優曇華院・イナバによって管理されている。

が、その薬の中に、死に至る毒薬が紛れ込んでいることは、鈴仙も永琳も気づいていない。薬が少なくなった時、鈴仙に瓶を見せていることあるが。何一つ疑問に思われたことがない。

阿求がそんなことをしたのには、何となく死のうと思ったからではない。

御阿礼の子は『幻想縁起』の編纂を終えるまでは、八雲紫や四季映姫・ヤマザナドゥや小

野塚小町などに生かされる。

先代達の時代は妖怪に襲われたり、流行り病に罹ったりしたため、『幻想縁起』の編纂の最中に亡くなってしまうことがあった。未完の『幻想縁起』は、人里に間違った情報を与えてしまい、幻想郷の人間が減ってしまう。そこで、『幻想縁起』の編纂を終えるまでの間は、御阿礼の子の生は保証されることになったのだ。

そのように保証された生の中で、『幻想縁起』を書き上げるまで御阿礼の子は死のうにも死ねないのであろうか、『幻想縁起』の編纂を終えなければ、おおよそ三十年と定められている時間が延ばされるのだろうか、と自らの生きられる時間のことを考えてしまうのは当然だった。

『幻想縁起』の編纂という公務を終えた瞬間、小野塚小町に命を刈り取られるかもしれない。全ての先代が公務後のことを記録に残していないのも、そういう可能性を考えてしまう一つでもあった。

稗田阿求が、『幻想縁起』編纂のためだけに生かされている、人間の姿をした人間ではないような存在に思えて不安で仕方なかったのである。

この毒薬がそんな阿求の願いを叶える唯一の物なのである。自らの手で死ねるということだけが、稗田阿求が稗田阿求だと思えるのであった。その瞬間のみ、御阿礼の子などという存在ではなく、稗田阿求として生きていると猛烈に思えるのであった。

もし、毒薬を服せば、紫が血相を変えて飛んでくるだろうか。仮に飛んできたところで、阿求の意識は既にないだろう。

次代の御阿礼の子は、もっと厳重な紫の監視下に置かれることになってしまうのか。あるいは、これほど平和ならば、もう、『幻想縁起』は不要と判断され、御阿礼の子は阿求で終ってしまうのだろうか。

稗田阿求にとって、次代の御阿礼の子が、どのような運命を辿ろうが何とも思わなかった。

「阿求、居る？」

と、玄関の方から藤原妹紅の声がしたのはそんな時であった。玄関まで行くと、厳しい寒さに阿求は震え上がった。

分厚いコート、マフラーに手袋と耳当て、と完全防備している妹紅を見て、急いで部屋へ上げた。妹紅の持つ暖色の風呂敷に視線を落とし、問うた。

「寒いですね、それは？」
「これお裾分け」
「何ですか？」
「大根」
「大根ですか？」
　妹紅が野菜を持ってくるのは今日が初めてではない。春は蕗の薹、夏は筍、秋は芋、と色々な物を持ってきてくれた。
　その好意に嫌悪感を覚えるわけではないのだが、どこか落ち着かない心持ちがあった。妹紅を火鉢で暖かな部屋へ通した。阿求も火鉢の前に座し、湯気立つお茶を飲みながら、妹紅の言葉を待った。妹紅はゆっくりと暖まりながら、こう言った。
「温かいのが良いなぁ」
「温かいのですか、少しお待ちください」
　妹紅の好意を振り払うのは失礼に思えた。その言葉に操られ、阿求が何か簡単な一品を振る舞う。そんなことが、妹紅が来た時の恒例となっていた。

少し前までは、『幻想縁起』に集中するために給仕が居たのだが、終りが近くなり、暇を出した。給仕は皆、阿求が生活できるのか心配しているようだった。阿求の輝かしい笑顔を見てもままだ不安だったらしく、『一人で暮らすということについて』という本を阿求に渡し、屋敷から去った。

この広い屋敷には、阿求と時々訪れる客人である妹紅と鈴仙の他には誰も居ない。料理も掃除も洗濯も、阿求一人で行うしかなかった。給仕達の本のお陰か生活ができないことはなかった。それでも、給仕達が居る時と比べて、随分と一日が短いように覚えた。

春は布団から出るのが億劫になり、のんびりと過ごした。そうすると、普段の調子で締めた帯が窮屈になったような違和感を覚えた。夏は暑く、火を扱う台所に向かいたくなくなった。ずっと洗濯をしておきたかった。秋は読書と食事に全てを捧げた。そうすると、また帯にいつもと違った苦しさがあった。冬になると水は冷たく、屋敷に入る隙間風に身震いを覚えることがあり、火鉢の前から動きたくなることが何度もあった。

『幻想縁起』の編纂に割ける時間は、給仕の居た時と比べると大きく減った。しかし、そういう何気ないことに、阿求は確かな満足を覚えていた。

料理は全然できなかったが、妹紅やミスティアや慧音のお陰で少しずつ作れる品が増えた。そういうこともあって、最近では妹紅のお裾分けに先の失礼とは全然違う申しわけなさを覚えていた。

妹紅は味噌の匂いに釣られたのか、部屋から出て、台所まで来ていた。阿求の持つ盆に並ぶ味噌田楽や徳利を見て、嬉しそうにこう言った。

「良いねぇ」

「ちょっと季節外れじゃないでしょうか？」

「良いんじゃない。私が何でもいいって言ったんだし」

つまみ食いをしようとする妹紅に、阿求はたしなめるように言う。

「駄目ですよ、妹紅さん。お手すきでしたら机の物、端に置いておいてくれませんか？」

両手を離せない阿求に代わって、妹紅はすぐに引き戸を開け、丸机に置いてある本や文やらを適当な所にしまってくれた。

「どこにしまう？」

「机の一番下に」

その時丁度、文机の一番下の引き出しを開けた。妹紅の紅くなった頬に青い色が走ったのを、阿求は見逃さなかった。妹紅は文をしまい、本を壁際に寄せてくれた。

細やかな食事会は、言いがたい空気を払拭するように催された。

「私、公務を終えましたら、お祝いに、どこかへ行きたいです」

「それは、ここから出て、旅をしたいってこと？　大変だよ？　雨に降られたら寒いし、泊まる所なんて野宿なんて当たり前よ？　ある人が優しかったら泊めてもらえるかもしれないけどさ。何より、行って、帰ってこないといけないんだからさ」

「でしたら、妹紅さん、一緒に来てくれませんか？」

阿求がそう頼んだ時、妹紅の箸が止まった。濃い紅色の頬は酒のせいだけではないだろう。少しの静けさの後、妹紅は一笑してこう言った。

「私？」

「はい、妹紅さんでしたら、外の世界について詳しいと思いますので」

『幻想縁起』を編んでいる時、当然、藤原妹紅のことも収めればならなかった。永琳や輝夜から妹紅のことを聞き、妹紅本人の口からも聞いた。妹紅本人は語らなかったが、妹紅の父

が原因で輝夜との仲が悪いことを教えてもらった。そして、外の住人であったことも知れた。
妹紅と外の世界に行けたら、きっと良いことが沢山あるだろう。そうして、普段通りに薬を飲んで、土に還れたらどれほど幸せだろうか。
阿求の思い描く幸福と比べて、妹紅の表情は全然明るくなかった。
「私じゃ駄目だよ。私は全然薬にも阿求の身体の状態についても詳しくない。鈴仙か永琳と一緒の方が良いわ。私だと何かあった時、何もできない」
「それでも……」
それでも良いですと続けようとした時、妹紅の瞳の底に蠢く悲しい気色を見て、阿求は何も言えなくなった。
「もう、自分が無力だと思うのは懲り懲りだわ」
藤原妹紅といえば、不老不死の薬を飲み、蓬莱人となった人間である。それだけでなく、炎を操る。そのような妹紅を、誰が無力と言えようか。
阿求は頬に血が上がってくるのを覚えながら、熱のある調子で断言した。
「妹紅さんはそんなことありません。無力だなんて、そんなことありません。……私が保証

します。ですから、生きて、必ず生きてここに帰ってきます……」

そこから先は言葉にならなかった。頬に温かいものが流れ、赤いスカートに幾つかの染みを作った。

どうして流れてきたのか分からず、阿求は戸惑った。堪えようとしても止めどなく溢れ、いつしか身を屈めた。

妹紅は一瞬目を瞠り、強張った顔をしたのが見えた。きっと、妹紅には身体の具合が悪いように映ることだろう。

阿求は必死になって否定しようと思った。が、言葉は何一つ音にならず、肩だけが激しく、喘ぐように、上下する。阿求はいつしか両手で顔を覆い、妹紅に心配をかけないように首を振った。

妹紅の大きな手がそっと背中を撫でていた。彼女の慈しむ声に浮き沈みする不安を、阿求は拭いたかった。けれども、咳き込むばかりで何も言葉にならなかった。

「ごめんなさい。そんなつもりで言ったわけじゃなかったの。あなたのことが心配で、ただ、それだけなのよ」

阿求は頷き、赤い目を妹紅に向けて、振り絞るように言った。
「……大丈夫、です。大丈夫……。妹紅さん、一緒に――」
妹紅の目も今にも溢れそうな涙があった。しかし、声はそんなことを思わせないほど優しく、力強かった。
「いいよ、一緒に行こう」

※

『幻想縁起』の編纂を終えた時、季節はまた一つ巡り、雪がちらついていた。灰色の雲が空一面を詰め尽くしていた。晴れていたら澄んだ空に、幾つもの星が輝いているのが見えたことだろう。
砂浜を歩きながら話す阿求と妹紅の言葉には、白い息が付き添っていた。左手を握る妹紅の手は、北風に晒され、随分と冷たかった。阿求の手も同じように冷たいことだろう。そんな些細なことが、何だか嬉しかった。
「寒くありませんか？」

「大丈夫だよ。阿求は？」
「大丈夫です」
「紫様様だね」
阿求と妹紅の旅に最も喜んだのは、紫だった。『幻想縁起』を編み終えた時、そのことを話すと、すぐに準備に取り掛かってくれた。ただスキマを用意するだけではなく、夏に行くのならば紗や絽の着物を織る、冬に行くのならば打掛や羽織を織ると息巻いていた。
予想外の出来事に気圧され、防寒性の高い臙脂色の長羽織を新調してもらうことにした。
長羽織は今までに羽織ったことのない温かさがあった。一体何を織ったのだろうか、と疑問に思うと、紫は嬉しそうに笑うだけで何も言わなかった。
ここを選んだのは、阿求の希望だった。幻想郷にはなく、最も外の世界を感じさせるのはここしかなかった。
海は四方を見渡しても、阿求と妹紅以外の人影は見当たらなかった。海というのは、人で溢れて返っているという知識があった阿求は、妹紅に純粋な疑問をぶつけた。
「妹紅さん、全然人がいませんよ」

妹紅は阿求の質問が面白かったのか笑いながら答えた。
「寒いからね。海っていうのは、大体、泳ぐ所だから。にとりだって冬場は引き篭もっているでしょ？」
阿求は砂浜に腰を下ろし、慣れない磯の臭いに時々両眉を寄せながら、暗い海を眺めていた。群れからはぐれた白い鳥が一羽で広大な海原を飛んでいった。
「私は眺めている方が好きです」
「私もそっちの方が好きだよ」
阿求は懐から一通の手掻を取り出し、努めて明るい声で妹紅に言った。
「妹紅さん、私が死んだ時にこれを読んでください」
「……今、そんなことを言わなくてもいいじゃない」
「今だから言えるんです。幻想郷に戻った時、私は生きているかどうか分かりません」
「どうして？」
妹紅の低い声に、阿求は怖気づきながらもしっかりと答えた。
「先代は誰も、『幻想縁起』の編纂を終えた後のことを記録してないんです。どうして、誰

も、書いてないんでしょうか？　それが怖いんです」

妹紅は優しい調子で、昔を振り返るように語り始めた。

「怯える必要はないよ。

……八代目・阿弥は、普通の女の子として生きた。それは次の御阿礼の子に伝えることじゃないって思ったから、書かなかった。日記を読まれるなんて恥ずかしいじゃない、って言っていたわ。

七代目・阿七は、最期までどういう男だったか分からないわ。編纂をしながら、私達宛に遺書を書いた。その遺書に従ったから、記録はないの。

六代目・阿夢は、真面目な女だったわ。仕事一筋の馬鹿な女よ。編纂を終えたら、私の役目はない、って言って、湖の底から見つかったわ。……だから、記録はないの。

五代目・阿悟は病弱な男だったわ。病床で編纂を続けていたわね。あの子は他に考える余裕なんてなかったでしょうね……編纂の途中で亡くなったのだから。

四代目・阿余は初めての女の子だったわ。四代目で初めての女の子だったから、阿礼も大いに慌てたことでしょうね。色々な所に色々な手紙を書いていたわ。私も何通か持っている。

手紙の最後はいつもこうよ。『この手紙の公開を禁ずる』って。記録は手紙だから散り散りとなっているのよ。

阿求の屋敷になかったら、紫か幽々子か……そこらへんに集中しているんじゃない？　何とか編纂を終えたけど、おかしい記述があって、この時代は大変だったのよ。紫に頼まれて、自警団なんてやったりね。

三代目・阿末は酒と女が好きで、紫に色々と言われながら書いたわ。そんなこともあってか、彼の編纂した物には誤字だとか読めない字とかあって、大変だったわ。こんな男の物を後世に残すのは恥だと、紫が全部燃やしたのよ。だから、残っていないの。

二代目・阿彌はの編纂の途中で、地震に巻き込まれたから、記録はないのよ。

初代・阿一のもこの時の地震に巻き込まれたんじゃないかしら」

妹紅が語り終えた時、阿求はどんどんと早くなる鼓動を必死に抑え込んで、こう訊いた。

「妹紅さん、あなたは何人の御阿礼の子と会ったことがあるんですか？」

月光を浴びる妹紅の頬に、輝くものが流れた。

「全員よ。阿礼や阿一からのお願いだから。皆が編纂をして、普通の子として生きられる時

間を過ごせるように。だから、ずっと側に居たわ」

阿求は烈しい幸福に襲われ、戦き、しばらく、息をするのを忘れた。息を吹き返した時、こういう言葉も出てきた。

「妹紅さん、私、幸せです。それ、捨ててください」

「うん、……良かった。私もだよ。あなたに会えてよかった」

阿求と妹紅はにっこり笑った。初めて触れた唇は寒さのせいか震えていた。

※

阿求は二通の手紙をしたためると、朝食を食べ、いつものように薬を飲んだ。薬を飲んだ時に覚える苦味がなく、飲んだ瞬間、これが毒薬であると理解した。

吐き出そうとしても、次の瞬間には心地好いまどろみの中にいるようで身体の自由が利かない。身体の力が急に抜け、文机の上に身体が落ちた。

『この手紙を妹紅さんが読まれているということは、私はメディスン・メランコリーに作成

を依頼した毒を飲んだ、ということでしょう。妹紅さんが発見したあの瓶の中に、私でもしっかりと思い出さないと見分けが付かないように、死に至る毒薬が入っていたんです。もっと、もっと生きようと思っていました。でも、怖いんです。私も妹紅さんも悲しむことが。

ですから、ここで、私も妹紅さんも最も幸福な今、死にます。何も言わずにごめんなさい。

さようなら、また会いましょう』

『この手紙を書いているのは、先代、九代目・稗田阿求です。あなたがどのような生活を送るのか全然分かりません。あなたが男の子なのか女の子なのかも分かりません。ですが、きっと、藤原妹紅と名乗る人が来ます。その人は優しいです。どうか信じてください。

私みたいに死んではいけません。生きられる限り精一杯生きてください』《了》

見出された時

枝垂れた柳に雨が降り、葉の先を伝い、丸い雫となって池に波紋を広げる。雨はそのまま川の底へと沈み、橋の下を流れ、海へと運ばれていく。橋の上を行く人間達は皆、傘をさし、上へ歩みを進めたり、下へ向かう。皆、どこかへ急いでいるようで、誰も足を止めることはない。傘の内から枝垂れ柳に視線が移ることがあっても、その葉の先に流れる雫までは届かず、海の方を振り返ることもなかった。

稗田阿求は目覚めたと同時に、頭の奥に痛みが走り、顔を顰めた。何か考えようとしたが、見上げた天井がいつもより高く、白く、それまで自分が寝起きしている寝床と違うことに気付いた。汗ばんだ身体を起こし周りを見てみると、足元の方には黒檀の机があり、徳利が何本か置いてある。枕の方には床の間もあり、一輪の花が挿してある。開け放たれた障子の向こうには、広縁があり、藤原妹紅が椅子に腰掛け、窓の向こうを眺めている。妹紅の前の小さな机には、急須や二人分の湯呑みが置いてある。

阿求は何か思い出そうとした時、頭の痛みが激しくなった。徳利の中を飲んだのは阿求自身であっただろうか、妹紅だったような気もするが思い出せない。そもそも、ここはどこなのだろうか。どうして、ここに居るのだろうか。阿求は頭痛に耐え、どこまで思い出せるの

かと記憶を探ってみたが、ここに来るまでのことが思い出せない。昨日は屋敷に居たのだが、そこから先のことが思い出せない。

永遠亭に床の間もなければ広縁もない。阿求の屋敷も同じだ。幻想郷に床の間と広縁が同じ所にある家を、阿求は知らない。

妹紅が居るということは、妹紅と一緒に来たということだろう。少なくともこうして同じ所に居るということは、妹紅は何か知っているに違いない。

「ここは……？」

阿求の声に気付いたのか、妹紅はこちらを振り向いた。妹紅の目の周りに隈が浮かんでいた。けれども、妹紅の目は普段と変わらない優しい色を帯びている。

「外の世界よ」

阿求は妹紅の言葉を否定しようとしたが、窓の向こうには阿求が見たことのない景色が広がっていた。阿求は布団から出て、広縁の窓に歩み寄る。

海原は穏やかだった。白波が岩肌にぶつかり、飛沫が飛ぶ。窓を開けると、冷たい風が阿求の身体を包む。波の音が遠くから聞こえてくる。

「身体に障るわ」

妹紅はそう言って、窓を閉めた。妹紅はそのまま阿求を椅子に腰掛けさせ、急須に残っていた茶を淹れる。阿求は冷たくなった茶を飲みながら、妹紅の言葉を待った。何も知らない阿求は自然と妹紅が何か話してくれるだろうと思っていたが、妹紅は阿求が切り出すのを待っているように、先程と同じように海を眺めている。

向こうの机に広がっている徳利、頭痛、妹紅の優しさ。これは昨夜、阿求が何かしたと物語っているには十分な証拠だった。恥を認め、妹紅に教えてほしいと言うべきなのだろうか。しかし、たとえそうだとしても、何故、外の世界に居るのか分からない。

妹紅に外の世界へ行ってみたいと話したことはある。しかしその時の言葉は、本当に外の世界に行きたいがために口にしたのではなく、「幻想郷縁起」の編纂が中々終わらず、息抜きがしたいということであったことは、妹紅も知っている。知っていなければ、「幻想郷縁起」の編纂が終わったら、と答えることもなければ、阿求が頬を膨らませることもなかった。

妹紅が阿求に黙って、阿求を外の世界に連れて行くことを計画していたとしても、阿求がここに来るまでの道のりを覚えていないのはおかしい。阿求の知らない間に何かあったこと

は明白だった。
「何かあったんでしょうか？」
「何もなかったのよ」
「でしたら、どうしてこんな所に？」
「忘れたの？　約束したじゃない」
「そんなこと……」
「思い出せないのは不安？」
「今までなかったことですから」
　今まで思い出せないことは時々あった。覚えている事柄が莫大なため、思い出そうとする記憶の手掛かりが脳に溢れ、整理に手間取ってしまい、思い出すのに時間がかかってしまう。今回の思い出そうとしている記憶の手掛かりが少なく、妹紅と関係している記憶を洗い出しても、現状と一致しない。
　何か知っているであろう妹紅は何故、何も教えてくれないのだろうか。妹紅にとって、阿求が思い出すことがまずい何かがあるのだろうか。早急に思い出さなければならない思いに

駆られるが、この部屋を見渡しても思い出せない。窓から外を眺めても、海原が広がっているだけである。外に出れば、何か分かるかもしれないが、外に出るのが恐ろしい。ここは阿求の知っている幻想郷ではなく、外の世界なのである。何かあった時、阿求の身を守ってくれる者はいない。

唯一、守ってくれるであろう妹紅と一緒に出掛けることも考えたが、今の妹紅は信用できなかった。もし、阿求が全てを正確に思い出せば、妹紅の手を引き、外の世界がどうなっているのか探索に出たことだろう。沢山のことを見聞きし、幻想郷に戻った時に一冊の本にすることも有り得ただろう。

妹紅を信用できないと思った阿求だが、阿求をここに連れてきたのは妹紅であり、記憶の手掛かりは妹紅しかない。妹紅が信用できない今、妹紅の口から語られる言葉を信用していいのだろうか。妹紅の言葉を受け、空白の日時が、妹紅の都合の良いように形作られていく可能性はある。妹紅がそんなことをするわけないと思っているのだが、ならば何故、阿求の尤もな疑問に答えてくれないのだろうか。妹紅からでは言いにくい何かが、昨夜あったのだろうか。

机の上にある徳利や頭痛や気怠さや微かな吐き気から、酒に酔い、粗相をしたのは起きた時から分かっていたことなのだが、それでもそれほどまでに沈黙を貫く必要はないのではないだろうか。覚えていない阿求がそう思うだけで、一部始終を見ていた妹紅はそんなことないのかもしれない。阿求は恥を忍び、訊いた。恥の中には、妹紅の言葉を皮切りに思い出すことがあるだろうという期待も混じっていた。

「私、何かしたんでしょうか?」

妹紅は阿求の顔を見て、そこに恥以外の感情が帯びているのを確認すると柔らかい調子で教えてくれた。

「ええ。色々なことを話してくれたわ」

「どんなことだったのでしょうか?」

平静を努める阿求だったが、妹紅の目の隈を見ると恐ろしかった。柔らかい声音で教えてくれる妹紅は、阿求が眠っている間、眠らなかったことだろう。その原因が阿求にあるというのに、妹紅は一切、阿求を責める気や怒りをぶつける気もなかった。阿求の心身を気遣うように、見守ってくれている。恐ろしいぐらい優しいのだ。一体、昨夜の阿求は妹紅に何を

話したのだろうか。

「楽しかったこと、編纂は大変だったこと、でもそれでも楽しいことは見付けられたこと……沢山の思い出を話してくれたわ」

「ここに着いてからのことは？」

妹紅の言うことは、幻想郷でも話せることだった。外の世界に来てまで、昨夜の阿求は何故、そんなことを妹紅に話しているのだろうか。妹紅と話したくて、そんなことを口にして、本当のことを話す準備をしていたのではないだろうか。

「それは私の口から言えないわね……」

妹紅は露骨に阿求の視線から逃れるように、海を見た。妹紅の頬に生じた朱に、阿求は追及を拒まれたような気がした。気がしたのではなく、それ以上、訊くのが途端に忍びなくなった。阿求は自分の予想が当たったようで妹紅と同じように頬が熱くなった。自分の記憶が思い出せないのは気持ちの悪いが、妹紅を辱めるのと同時に、自分自身を辱めるのは、阿求一人だけの気持ちの悪さを上回るものだった。

海は絶えず波を起こし、飛沫を上げる。波の動きを見ると、騒がしい胸や熱い頬が不思議

と落ち着く。頭の底、胸の底から冷たいものが生まれ、波の動きと呼応するかのようにゆっくりと全身に広がっていく。海を見たことのない阿求がそんな落ち着きを感じるのはおかしなことだったが、阿求は御阿礼の子として九代目である。先代や先々代の思いが長い時を隔てても、どこかに残っているのだろう。しかし、海という限定されたものになると、その思いを有しているのは、海を見ていくつかの和歌を書き留めた阿礼や阿一の二人しかいない。

彼等のことを思うと、阿求は今朝見た夢のことを思い出した。柳から落ちた雫は今頃、もう大海原を旅しているところだろうか。雫はどうなるのだろうか。海の底に沈み、いつしか雫だったことすらも忘れて、深海という暗い所に閉じ込められてしまうのだろうか。あるいは、人間の家庭に辿り着くのだろうか。自然の内に落ちるか、人間の内に辿り着くか、どちらであれ、もう雫という名前も丸い形も見付けられないことだろう。名前だけではなく、この雫が遠い地から旅を続けてきたことすら知られることはない。

そんなことを思い出していると、阿求の目の前に広がる海がぐっと近付いているように感じる。打ち上げられた飛沫が再び海の内に落ちるのすら、鮮やかだった。いつの間にか雲の切れ間から陽の光が降り注ぎ、白波が一層白く、岩に飛び散る波の一粒一粒まで見て取れる。

その一粒に、不安げな表情をしている阿求自身すら見えた。

阿求はまるで自分がまだ夢の中にいるかのような浮遊感を味わい、妹紅に縋るようにこういう言葉を投げた。

「なんだか、まだ夢を見ているようです」

妹紅は茶を啜り、阿求を見た。鴎の鳴き声が部屋に響いた。

「夢、なのかもしれないわね」

妹紅はそう言って、阿求の頬に触れた。阿求の頬に触れる妹紅の顔に慈しむようなものが広がり、阿求が声をかけようとした時、妹紅に頬を引っ張られ軽い痛みが走った。

「現実だったわね」

「痛いです」

「安心した?」

手を離し笑う妹紅に、阿求は疑問を懐いた。阿求の言葉を聞き、妹紅は阿求に現実を認識させるような行為に出たが、あの沈黙の間に妹紅はもっと別のことを考えていたように思う。頬の痛みが現実だと教えてくれたが、この痛みすら夢の中の出来事なのかもしれない。阿求

は夢の中で夢を見て、まだ夢を見ている。妹紅は勘付かれないように、阿求に現実だと錯覚させている。

いつから、阿求は夢の中の夢にいるのだろうか。阿求のこの思考すら夢の中の一部であり、現実ではまだ眠っているだけなのではないだろうか。しかし、阿求は目覚めても夢のことを全て覚えている。この考えも目覚めれば、夢の中の夢とまとめられることなく、つぶさに思い出せる。妹紅もそのことを知らないわけではない。となれば、何故、妹紅はそんなことを考えているのだろうか。もし仮に、この今が夢であったとしても、妹紅の目の下の隈を、夢の一言で片付けてはならないような気がした。夢の中であろうと、妹紅が寝られない日を過ごしたのは明らかだった。

阿求の記憶から抜け落ち、妹紅に何かを伝えた昨夜のことを思い出せれば、妹紅が寝られなかった意味も分かるかもしれない。阿求は今、生涯を通じて初めてのことを経験している。本来、御阿礼の子が忘れるということはしない。全てを記憶し、記録して、後世に伝える役目があるためだ。その九代目である阿求が、忘却を体験している。阿求と妹紅は昨夜、一体何を話し、今日という日を迎えたのであろうか。分からないことだったが、阿求は心の端で、

思い出せないことに対する諦めから、こういうことを思っていた。忘れなければならない出来事だったのかもしれない、と。そう思うと、何故、忘れなければならない出来事だったのか、という疑問がすぐに生じる。

阿求の頭はいつしか深くまで考えることができるようになっており、頭の痛みは治まっていた。阿求は複雑に絡み合う思考を落ち着かせるように、冷たくなった茶に口を付けた。

阿求が目覚めた時、今と同じようにこの机に二人分の湯呑みが置いてあった。昨夜、阿求と妹紅は今と同じようにこうして話をしたことを意味している。昨夜、何度かこうして妹紅を見上げたことがあっただろうか。苦悩に満ちた瞳に、阿求はどういう言葉をかけたのであろうか。妹紅にどういう言葉をかけられたのであろうか。一夜明け、言えなかったようなことを、妹紅は口にして、阿求は耳にしている。

昨夜という時間が、強く現在に作用している。現在が現実である確証はなく、同時に昨夜という時間が夢であるという確証もない。しかし、阿求は夢を見ている。夢を見るということによって、眠っていたことを保証し、昨日という日が存在していたことを教えてくれる。夢や眠りというものが、忘却の際に役立つとは思ってもいなかった。阿求は「幻想郷縁起」

の編纂が終わる頃から、眠るという行為が苦しくなることがあった。一度眠ると、もう二度と目覚めなくなってしまうのではないかという不安が、阿求から眠りを奪う。眠れない日が続いたが、眠れる日もあったが、それは阿求にとって眠れる日ではなく、絶えず緊張と戦う夜であり、身体が急に緊張を覚え、唐突に目覚める時が何度も続いた。

そういう日々が続いていたことを思い返すと、こうして夢を見られるほど眠れた日は随分久し振りのようであった。心地良いもののはずが、忘却というものがついてくるとなれば、何も心地良いものではない。何故、昨夜は眠ってしまったのだろうか、という後悔すら生じてくる。

この夢のような世界から目覚めた時、阿求は一体どこで目覚めるだろうか。幻想郷であろうか、外の世界であろうか。屋敷であろうか、永遠亭であろうか。あるいは、永遠に目覚めないのであろうか。もしかすれば、阿求は阿求の知らない間に息を引き取っているのではないだろうか。そう考えると、妹紅が眠れなかったのも、話せなかったのも分かる。阿求がすでに亡くなっているとなれば、この胸の鼓動はどういうことなのであろうか、この肌の温もりはどういうことなのであろうか、足の裏に覚える床の冷たさはどういうことなのであろう

か。亡くなっているとは思えず、夢とも思えない。最初に考えていた通り、ここは現実であり、外の世界であり、阿求は生きている。茶を飲むと少し苦い。

阿求はその時、ほとんど無意識の間に胸底からこういうことを言った。

「私、もうすぐ死にます」

驚いたのは妹紅だけではなかった。阿求も妹紅と同じように目を瞠った。そういうことを考えていたわけではなかった。唇は阿求の思いを裏切るかのように、そういう言葉を口にしていた。そして、妹紅がどう答えるかも、阿求は知っていた。昨夜も同じ言葉を聞いたのだから。

「そうね」

「幻想郷縁起」の編纂が終わりに近付いた頃、阿求は自らの命が長くないことを自覚した。阿礼は長寿であったが、初代御阿礼の子である阿一は短命であった。短い一生の間で、沢山のことを見聞きし、記録し、後世に伝えるように生き、次代の御阿礼の子には何もすることがなければこの書の編纂を続けてほしい、と書き残している。

今では、御阿礼の子が一生をかけて、編纂しなければならないとなっているが、阿一はそ

うは考えておらず、自らの一生の内に何かすることがないかと考えた時に、この書を書き進めていた。人間の世が少しでも良くなるために。「幻想郷縁起」が存在するから御阿礼の子が存在するのではなく、御阿礼の子が存在するからこそ「幻想郷縁起」が存在する。しかし、編纂を終えた時、阿求は何かしたいことはなかった。充足感に満たされ、新たに何かしたいという思いが芽生えてこなかった。充足感だけではなく、自らの生の残りが短いからこその諦めもあったのかもしれない。

阿求はそれからの日々をどのようにして生を終えるのか、と考えることが増えた。幻想郷の中で一生を終える気はなかった。阿礼も阿一も外の世界で生き、死んだ。阿求も彼等と同じように、外の世界で死にたかったのである。名残惜しむように、幻想郷の景色が煌めくように見えたのは丁度、その頃からである。外の世界のことを考えると、幻想郷の木々や空や空気がそれまでと全然違い、澄んで見えた。自然が姿を変えたのではなく、阿求の五感が死に近付き、研ぎ澄まされてようだった。

海に身を投げる勇気もなければ、毒薬を仰ぐ勇気もない。短命であるこの身を、自らの意志で更に縮めたくない。刻一刻と迫る死を味わい、満足に死にたかった。今こうして死を思

うと、昨夜の熱い涙が込み上げてくる。頬に流れる涙を拭うと、妹紅が優しく抱き留めてくれる。柔らかい胸に包まれると、折角固めた決心が鈍くなる。

妹紅は優しい人だった。絶えず、阿求の側で見守り、支えてくれる人だった。阿求だけではない、御阿礼の子の記録に妹紅の名前を見なかったことはない。不老不死の人だった、自らの生に諦めながら、御阿礼の子達の前では笑顔でいられる強い人だった。この人と一緒だったら、阿求は大丈夫だろうと思った。

「死にたくないんです……でも、でも、私」

「大丈夫よ、大丈夫。大丈夫だから」

死を恐れているからこそ流れた涙ではない。妹紅と別れるという逃れられない運命から逃れたいがために止めどなく溢れてくる涙だった。

妹紅は阿求を止めなかった。老いることも死ぬこともない妹紅の血を飲めば、阿求も妹紅のようになれるかもしれないと考えたのは阿求も妹紅も同じだった。しかし妹紅の血を飲まなかった。

「私は稗田阿求として生きて、稗田阿求として死にます」

「私もその方が嬉しいわ」
「でも、でもね、妹紅さん、もう少しだけ生きたいんです」
「生きたいだけ生きればいいわ。阿求の人生なんだから」
阿求は妹紅の手を強く握った。どれほど生きられるのかは、阿求にも妹紅にも分からない。この手を絡められたまま息を引き取ることを許されれば、どれほど幸福だろうか。この胸の中で永遠の眠りに就ければ、離れ離れにならないだろうか。
「私が死んだら、その亡骸を抱きかかえて、海にお願いします」
「……皆、海が好きね」
「海は静かですから」
阿求は泣き疲れたのか、そのまま妹紅の胸の中で眠った。妹紅が焦ったように声をかけたが、返ってくるのは寝息だけだった。
妹紅は阿求を抱きかかえ、そのまま布団に眠らせる。阿求は今、夢を見ているだろうか。かつて言っていた、雫の夢でも見ているのだろうか。妹紅は広縁から阿求の呼吸が途絶えないのか、阿求が目覚めるまで見守り続けた。《了》

白露

「まだ帰って来てないの？　手紙は？」
「それが何にも……。何か聞いてませんか？」
「何も聞いてないわ」
藤原妹紅は稗田阿求の屋敷へ足を運び、阿求が不在であることにいよいよ驚きを露わにした。稗田阿求が永遠亭に行って、今日で一週間となる。女中も心配なようで、何か知っているのではないかと妹紅の前に腰を落ち着かせたが、妹紅が何も知らないと分かるとすぐに立ち上がろうとした。
「待って」
「何か？」
「少し、話し相手になってちょうだい」
「私でいいんですか？」
「ええ、いいのよ」
と言ったが、妹紅と女中の間に沈黙が降ってきたのはすぐだった。女中は慣れないことなのか、落ち着きなく、ぎこちなく黙っている。妹紅は机の上に茶が一つしかないことに気付

き、腰を上げようとした。女中はすぐに妹紅が動こうとしたことに気付き声を上げた。
「どちらに？」
「あなたの分の紅茶を」
「いえ、私のことは気になさらず……え、いや、私がやりますので」
「いいのよ、別に。話し相手なんだから」
柔らかく女中を制し、妹紅は台所へ向かった。どこに何があるのかは女中より妹紅の方が詳しかった。台所に向かう途中に書斎の方へ足を運んでみたが、障子はやはり閉ざされていた。戸には丁寧な字で書かれた『編纂中です、入らないでください』という札が掛けられている。これは阿求が考えた女中対策である。あの女中はよく編纂中の書斎へ入ってきた。編纂中は静かでないと集中できない阿求は、すぐにその音に反応し、困ったように両眉を寄せる。
女中は阿求にも弁明していたが、悪気があって編纂中に入ってきているのではない。むしろ、非常に気を遣っているのだ。阿求は毎食後に紅茶を飲むのを常としていたが、起きた時や寝る前、編纂の途中に、紅茶や軽い食事を食べることが多かった。そういう習慣を、女中

も知っていたためか、女中が書斎に来るのは、鉄瓶が空になった頃や漆器の更に菓子がなくなった頃だった。

その気遣いが双方の間で上手く伝わらず、自然と妹紅が取り持つことになった。だから妹紅が女中の代わりをすることもあれば、阿求の言葉を女中に伝えることもあった。

妹紅は台所で紅茶の用意をしながら、新聞を読む別の女中に声をかけた。女中は眼鏡を外し、静かに答える。

「阿求のこと、書いてある？」

「書いてあるわけないじゃないですか」

「やっぱり？　何か良いことある？」

「季節の変わり目だから気を付けてください、って」

「もう？」

「もうです……紅茶、運んだ方が良いですよ」

「もうちょっと蒸らさないと」

「あの娘は、あんまり好きじゃないです」

「そうなの？」
「砂糖はそちらの棚にありますので。三つあれば足ります」
「……甘くない？」
「甘い方が好みなんです」
「阿求と大違いね」
「大変ですよ」
「お疲れ様、ありがとうね、いつも」
「仕事ですから」
　阿求の代になって、変わったことは幾つかある。一つは九代目が乙女なこと。一つは女中が全員変わっていること。一つは紅茶の消費が屋敷に広まったこと。一つは書斎に蓄音機が置かれるようになったこと。乙女の趣味が屋敷全体に広がり、八代目の阿弥と比べて、時がゆっくりと動いていること。
　一つ一つ数えはじめると沢山あるが、変わらないこともある。例えば、妹紅が屋敷に来ること。これは、初代である阿一の代から続いている。まだ幻想郷が幻想郷と呼ばれず、外の

世界の村だった頃、妹紅は阿一と出会った。彼はあの村で珍しく、字が読め、書けた。妹紅もその珍しい一人であったため、彼の書を覗いたり、言葉の意味を訊いたり、阿一の分からない部分も手伝ったりしていた。そういう生活は長続きせず、いつまで経っても若い妹紅を、阿一は訝しむ、村の平和のために、妹紅を拒んだ。

それでも、こうして妹紅が屋敷に足を運んでいるのは、阿一が一生を終え、阿爾に転生し、阿爾が亡くなり、阿未がこの世に生を授かり……阿求が育ったからである。もし、御阿礼の子が妹紅や輝夜のように老いることも死ぬこともなければ、妹紅はここまで足を運ばなかったであろう。

足繁く通うのは、今度の御阿礼の子はどのような一生を歩むのであろうか、先代のようなことは起きないであろうか、そういう老婆心からだった。もし、先代達と同じような失敗を繰り返そうとするのならば、妹紅が制しなければならない。もし、変わったことがあれば、妹紅が支えなければならない。先代の話を交えながら。先代達の思い返してみると、やはり、今回の事は何かが変だ。

客間に戻り、机に紅茶を置くと、女中はすぐに三つ砂糖を入れた。

「やっぱり、長いわ」
「阿求様ですか」
「そうよ、前はこんなことなかったんだけどね」
「前……阿弥様の時にも、永遠亭に行くことはあったんですか？」
「あったわ。けど、仮に検査だとしても、ここまで時間がかかったことはなかったわ。時間がかかりそうだったら、永琳が一筆執らせるし」
女中の顔が微かに曇り、妹紅はすぐに否定の言葉を並べた。
「阿求が倒れたとかだったら、鈴仙が飛んでくるから大丈夫よ」
そういう言葉を並べた妹紅であったが、妹紅自身も女中の思っているようなことについて考えないわけではなかった。何の連絡もなく帰らないとなれば、そういう可能性も考えてしまう。阿求の生はもう折り返し地点に至っている。
御阿礼の子が永遠亭に足を運ぶようになったのは、阿求が初めてではない。阿弥の代から、里の診療所の設備や医者では限界が生じるようになった。阿弥の生きると、人里の生きる感覚に微妙な違いがあり、信用できなくなったと漏らしていた。それからというもの、鈴仙が

薬を届けに来る時に状態を診るのだが発見できないこともあり、定期的に永遠亭に足を運ぶようになった。

それでも、今回のように何の連絡もなく帰ってこない日はなかった。女中との話を適当なところで切り上げ、永遠亭へ様子を見に行った方が良さそうだ。

女中に一声かけようとした時、玄関の方が騒がしくなった。大きな声が響いてきた。

「阿求様！」

客間の空気が軽くなり、妹紅と女中が動こうとしたのは同時だった。女中は俊敏に反応し、すぐに客間から出て行った。騒々しい足音が遠ざかるのを聞きながら、妹紅は何事もなかったように腰を落ち着かせた。女中のように彼女の元へ駆け寄りたかったが、一気に阿求の元へ人が集まれば、彼女を心配させてしまうことだろう。

女中が客人が来ていることを知らせるのならば、阿求の方から妹紅の所に来ることだろう。妹紅は静かに茶碗を傾け、阿求を待った。阿求が来た時、何を訊こうかと考えながら。阿求が永遠亭へ訪れている間、書斎は一度も開けられていない。となれば、目を通さなければならない物が堆く積まれていることだろう。

妹紅が客間を出た時、二人の女中に挟まれ諦めたように微苦笑をする阿求が来た。久し振りに見た阿求は、記憶の中と比べて少し頬周りの肉が削れたようで、薄い影が入っているようだった。けれども、妹紅はそんなことを気にしないように笑顔を浮かべた。

「お帰り、長かったじゃない」

微笑を浮かべる阿求の言葉の端に、妹紅は聞き慣れない棘を感じた。少し距離を覚えさせるような痛みだったが、妹紅は踏み込むように言う。

「ただいまです。何かありましたか？」

「何もなかったら来ないわよ」

「紅茶でも飲みますか？」

阿求は機敏に二人の女中に命じていたが、言葉の最後の方は強い調子を無理に吐いているように聞こえた。

「書斎でも構いませんか？」

「ええ」

一週間振りに踏み入れた書斎は、庭の空気を浴び、冷たくなっていた。雨が降っていたの

か庭の葉はいずれも濡れ、雫を滴らせていた。阿求は文机の上に積み上げられた葉書や手紙を見て、困ったように眉を寄せた。そのどれもが、阿求の体調を伺うものであった。

返事を認める筆の走る音の間を、時々、露が落ちる音が響いた。妹紅は阿求の筆運びを見ながら、その指先も少し細くなったような錯覚を覚えた。妹紅は殆ど確信を持って訊いた。

「倒れたのね？」

「済みません、黙っていて」

「遅かれ早かれ、起きてしまうことだからね、いいのよ」

「言おうとした時には病床でして」

「でしょうね」

阿求は筆を置き、堪えていた胸の痛みを吐き出すように何度も咳を漏らす。苦しそうに寄る眉や薄っすらと瞳に浮かぶ涙を見て、また永遠亭へ帰るのだろうと分かった。今度は一週間と短い期間ではない。そのまま、もう屋敷には帰ってこないことも有り得るかもしれない。

永遠亭に足を運べばいつでも会えるかもしれないが、ここで阿求とこうして会い、話せるのは残り僅かかもしれない。妹紅が去った後、再び永遠亭に向かうことだって考えられる。

どうして、帰ってきたのであろうか。そんな残酷な質問をぶつけられるほど、妹紅は阿求達を知らないわけがなかった。

永遠亭は御阿礼の子の家ではなければ、帰る場所でもない。御阿礼の子が帰ってくる場所はこの屋敷なのだ。そして、そこで待つ者達こそ、帰ってくる所なのである。そこで安らかな眠りに落ち、次代へと転生すれば良い。しかしそれは、妹紅達を始めとした外部の考え方である。

阿求は一つの返事を書き、庭へ目を遣った。葉の先の白露が落ち、寂しい音が書斎へ広がった。一つ落ちたかと思えば、少し間隔が開き、また一つと白露が落ちる。阿求はそのうち、ぽつりと本音を漏らした。

「冬まで頑張るって約束したんです」

「……どうして冬なの？」

「秋は寂しいじゃありませんか。寂しくありませんでしたか？」

妹紅は小さく頷き、目頭を抑え、こういう我儘を口にした。

「でも、冬は寒いわ。春は楽しくないし、夏は涼が欲しくなるのよ」

「それは随分と困りましたね」

阿求は安心したように嬉しそうに笑う。妹紅も釣られて笑う。もうすぐ、山の葉が色付き、霜が降り、厳しい寒さが続く頃になるだろう。その頃、阿求はどこにいるのであろうか。ここではないどこかへいるのではないだろうか。

別れはいつでも嫌だった。次代へ転生するといっても別れは別れなのである。御阿礼の子の側にいるだけで、妹紅はどれほど彼等を支えられ、助けになっているのか分からない。妹紅はそういう手助けや支えになれない人間であった。そういう感覚は命に限りがある者達の特権であり、妹紅にとっては辛い体験になるからだ。しかし、それでも、御阿礼の子達にはそういう感情が働いてしまう。

「冬までなんて言わず、もっと、一杯……もっと」

「妹紅さん……」

阿求のか細い指が妹紅の頬を撫で、露を拭う。震える手で妹紅を包み、こういう和歌を囁いた。

「夕置きて明日は消ぬる白露の消ぬべき恋も我れはするかも」《了》

初めての朝

目覚めると日は思ったより高いところに昇っており、陽射しが床に入ってきた。稗田阿求は後少しの間だけでも布団に籠もっていたかったが、いよいよそういう余裕もなくなり、起き上がった。障子を開けると清々しい風が床を満たしたが、目覚めて間もない阿求の身体には冷たく、羽織を引っ掛けた。

『幻想郷縁起』の編纂を終えてからの屋敷は森森と物静かになり、いつもならば阿求を起こしに来る者も自らの家に戻った。お陰で、屋敷の隅々の音が阿求の耳に入るようになった。今も台所の方から、火の立つ音や包丁を小刻みに動かす音が聞こえる。女の調子の良い小唄も聞こえてくる。

阿求は勝手に台所が使われていようが焦ることなく、むしろ微笑を浮かべ、軽い足取りで居間へ向かう。居間の奥にある台所には、一人の女が背を向けている。雪のように白い髪をした女を見て、阿求は予想的中したように柔らかく笑った。

阿求は女の隣に歩み寄り、手際を確認すると、しまってある茶碗や箸や小鉢を出した。藤原妹紅は阿求の様子を見て、一声だけかけると料理に戻る。阿求は妹紅の隣へ行ったり、ご飯やお茶を用意をはじめた。

「今日は何ですか？」
「蕗が採れたのよ」
「早いですね」
「頃合いよ。本当なら天麩羅にする予定だったんだけど、しんどいでしょう？」
「お昼だったら、良かったんですけどね」
「お昼だけどね。ゆっくりしていていいの？」
「いいんですよ、やることはもうやりましたから」
「本当？　ぎりぎりになって慌てない？」
「大丈夫ですよ。ご飯を食べて、着替えて、おしまいですから」
「そう、順調ね」
「妹紅さんのお陰です」
「私はそんな」
「そうですか？」
「そうよ」

「でも、私、妹紅さんと一緒に過ごせて良かったですよ?」
「……ありがとう」
二人はそんなことを話しながら、食卓に着き、遅い昼食を食べ始めた。腰を下ろした妹紅はすぐに立ち上がろうとしたが、その視線の先の棚には酒があることに気付き、阿求はわざとらしく咳払いを一つ零した。小さく箸を進める阿求を見下ろすと、人懐っこい笑みを浮かべる。
「駄目?」
「駄目です」
「今日だけじゃない」
「今日、妹紅さんには大切なことをしてもらいますから駄目です。昨日も言ったじゃないですか」
優しい調子でそう告げると、妹紅は顔を引き締め黙々と昼食を食べるようになった。『幻想縁起』の編纂を終えた今、阿求がしなければならないことは転生の準備程度である。その中で妹紅に役目があるととなれば、彼女もその重要性を分かっているのであろう。阿求が思

っているよりもはるかに妹紅は転生について詳しいのかもしれない。妹紅は、先代の御阿礼の子とも出会っている。阿求にしているように幾人ものを支え、見守り、送ってきた。今更、阿求が改めて言うようなことはないのかもしれない。

しかし、阿求が妹紅と会ったのは今回が初めてである。自分の口から伝えたいことの一つや二つある。御阿礼の子としてではなく、阿求として妹紅に伝えたいことがある。

昼食を食べ終え、台所で二人分の紅茶の準備をしている時、阿求は徐ろに口を開けた。妹紅は縁側に出て、爽やかな風を受けながら白い海を見ている。妹紅は何か考えていたようで、僅かだけ沈黙が落ちた。

「妹紅さんは、これからどうするんでしょうか？」

「やめない、その話？」

「知りたいんです」

転生の準備が近付くにつれ、妹紅とこのように話せる時間もなくなる。妹紅も転生が近付くと足を運ばなくなることも有り得る。この機会を逃せば、もう会えなくなるのではないか。そんな予感が阿求の胸にはあった。

妹紅はどう答えればいいのか迷っているようで、紅茶を用意してもまだ答えなかった。阿求が生まれるまでの間そうしていたように、竹林で暮らすことだろう。阿求が知りたいのは、そういう生活のことではない。不老不死である妹紅が死に絶えることはない。もっと妹紅の心情に寄ったものである。次代の御阿礼の子にも関することである。

妹紅もどういうことを訊かれているのか分かっているようで、少し難しそうな顔をして黙っている。わざとらしく紅茶をすすったり、ティーカップを音を立てて置いたりする。何か言おうとして、言葉にできないもどかしさが妹紅の中にもあるようであった。

阿求は耐えきれなくなったように質問を変えた。妹紅は今までの沈黙が嘘であるかのように即答した。

「妹紅さん、また会えますか?」

「会えるわ。会いに行く。一つ、また一つと年をとって、少しずつ大人になっていくのを見守るためにも。……楽しみにしているの」

「楽しみに?」

「大人になるっていうこと。嫌い?」

「考えたことありませんでした。考えないようにしていたんだと思います。そんなことより、今を大事にしたかったんです。向こうでお会いする人に言うんです。こんなことがあったって、沢山話すんです。それで、楽しいことで一杯にするんです」

昨晩、妹紅に訊かれた。これからどうするのかと。阿求はその時、まだそんな先のことは考えられないと答えた。その答えは紛れもなく阿求の本音であったが、今と同じように考えないようにしていただけではなく、純粋に考えてなかった。妹紅の言うこれからがどこまでの範囲なのか分からなかったのかは勿論のこと、阿求自身も、これからというのがよく分からなかった。

一夜明け、阿求なりのこれからが分かった。阿求のこれからと妹紅のこれからは全然違う。片や人生の折り返し地点に立ち、片や老いることも死ぬこともない。これからという言葉の範囲が異なってしまうのは当然のことだった。

どうなるのかは阿求自身も分からない。それでも、辛い思いをしたくない。次代に至るまで楽しい思い出で溢れさせるのである。これから暮らすこの場所が、素敵な場所であると知ってもらえるように。

阿求がそうであったように先代の記憶は全く覚えておらず、記録で知れる程度である。それでも、朧気ながら頭の片隅に存在する先代の記憶があるのは確かだった。その思い出を華やかなものにしたい。華やかなものが難しそうであれば、慎ましいながらも彩られたものにしたい。それが御阿礼の子としての最後の役目であろう。

そんなことを考えていると妹紅と離れる時が刻一刻と近付いているようで、阿求は胸の底が熱くなり、途端に鼻先が痛くなった。妹紅はすぐに阿求の変化に気付き、手を伸ばしたが触れていいのか躊躇い、下ろした。もし、今、妹紅の温もりに触れてしまえば、阿求は容易く泣いてしまったことだろう。

不老不死である妹紅と出会い、生活を共にしてしまった以上、こうなることは分かっていた。悲しくならないように、辛くならないように今日という一日を過ごそうと思った。それまでのかけがえのない時が、輝かしいものとなって瞳に蘇る。

零れ落ちないように顔を上げると、約束の時刻まで間もない。妹紅は阿求の手をとった。二人は何も言わずに互いの顔を見合い、一笑し、最後の準備に取り掛かることにした。

髪を結い、着付けを終え、妹紅と向き合う。妹紅は阿求を見て素直な感想を口にした。

「綺麗ね」
阿求は恥ずかしそうに視線をずらし、妹紅へ紅皿と紅筆を手渡した。阿求は目を閉じ、妹紅の行為が終るのを待つ。
「泣いてもよかったのよ？」
問われ、阿求は目を開けた。妹紅は紅を穂先に染み込ませているところだった。筆を持つ妹紅の指が震えているように見え、阿求は何も見ていないように再び目を閉じ、こう答えた。
「私が泣いたら、妹紅さん泣かないでしょう？　私を慰めて、慰めて、泣き止むまで側にいてくれますから」
「そうね」
「だから泣きません」
「強いね」
「一人だったら、きっとどうしようもなく泣いたと思います」
「……でしょうね」
「でも、一緒にいるから大丈夫です。ずっと一緒にいるから大丈夫です」

声は返ってこない。阿求は黙って、目を閉じ、待つ。紅が引かれれば、阿求は屋敷を去る。これは阿求は自らの意志で選んだことだった。

御阿礼の子は、三十年以上は生きられない。先代の記録を読むと二十の後半に差し掛かる頃には、病に伏せ、全身の痛みと戦い、苦しい呼吸を続け、やがて絶命する。阿求はそうなりたくなかった。そこまでして生きるのが恐ろしかった。痛みと共に生き長らえ、阿求にできることは一体何なのであろうか。

阿求はこの身の隣に、終生の存在を求めた。妹紅のように老いることも死ぬこともない大切な存在ではなく、阿求と同じようにやがてあの河の向こうで再会できる人間を求めた。

ゆえに、阿求はこの屋敷を去ることに決めた。誰にも言わず屋敷を去るつもりだったのだが、妹紅だけには打ち明けなければならないと思った。それが、昨晩のことだ。妹紅は目を潤ませ、初めてね、と呟いた。

阿求の唇に細い筆が触れ、紅が引かれた。目を開いた時、赤い目をした妹紅が見えた。妹紅は阿求に触れず、口元に寂しそうな微笑を浮かべた。阿求も妹紅に触れず、鏡を見た後、恭しく頭を下げた。

かくして、稗田阿求は一人の妻となった。《了》

後書き

この度は出藍文庫の新刊「夏と靴」他数篇をお買い上げいただき誠にありがとうございます。この新刊は書き下ろし一編と合同誌を主催した時に書いた稗田阿求と藤原妹紅の短編等々、他の方が主催された合同誌に寄稿した短編の総集編となっております。随筆やら和歌やら漢詩やら小説やら多種多様な方法による、稗田阿求と藤原妹紅の関係が楽しめると思います。

可能な範囲で誤字脱字等々の修正を行っております。

表紙絵を承ってくださったサバ缶氏、査読を承ってくださったｔｏｓｈｉ氏にこの場でお礼申し上げます。

初出は以下の通りです。

夏と靴　書き下ろし

秋雨　東方随筆合同「移り香」（発行：出藍文庫）

夢の続き　夏目漱石没後百年記念「東方近代文学合同『それから』」（発行：出藍文庫）

四季　東方和歌合同「ことのは」（発行：出藍文庫）
二星　東方外国文学SS合同「メーティスの雫」（発行：出藍文庫）
流転　東方漢詩合同「折楊柳」（発行：出藍文庫）
幸福な死　東方毒殺合同（発行：雅趣雅俗・主催：春日傘氏）
見出された時　東方フランス文学合同「失われた時を求めて」（発行：出藍文庫）
白露　東方二十四節気合同（発行：真夏の冬だぬき工房・主催：ぽんきち氏）
初めての朝　書き下ろし

サークルカットに用いた俳句ですが、書き下ろしである「夏と靴」の一場面を思い描いた一首となっております。

薄物の　足元飾る　ハイヒール（季語：薄物）

二〇一七年八月中旬　近藤貴弥

あきゅもこ総集編「夏と靴」

発行日　2017 年 9 月 18 日　初版

原作：東方 Project（上海アリス幻樂団）

印刷：ちょ古っ都製本工房

発行者：近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先：stkk7.920521@gmail.com

表紙絵：サバ缶

※本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。